

帝国石油新長岡ライン

埋蔵文化財発掘調査報告書

試掘確認調査報告
吉井水上I遺跡
戸口遺跡

1987

柏崎市教育委員会

帝国石油新長岡ライン

埋蔵文化財発掘調査報告書

試掘確認調査報告
吉井水上I遺跡
戸口遺跡

1987

柏崎市教育委員会

書告璿遠歸賜教復文疏賈

臣聞聖朝留心典誥
選舉之士不遺遺
胡、漢、齊、魏、

皆以考課之法
考課之法皆以考課

考課之法皆以考課
考課之法皆以考課

考課之法皆以考課
考課之法皆以考課

考課之法皆以考課
考課之法皆以考課

考課之法皆以考課
考課之法皆以考課

序

柏崎市の東部に位置する吉井地区は、市内でも稲作の盛んな地域の一つであり、また、市内でも最も遺跡が密集する地域であります。

この度、帝国石油㈱新潟鉱業所が、ガスの長期安定供給を確保するための、越路町来迎寺から頬城村三分一に至る「新長岡ラインパイプ敷設工事」を行うことになりました。

この報告書は、この「新長岡ラインパイプ敷設工事」の実施にあたり、実施地域に埋蔵されている文化財の発掘について、当市教育委員会が帝国石油㈱新潟鉱業所から委託されて実施した発掘調査の記録であります。

調査は、8月に試掘確認調査、刈り入れ後の10月に発掘調査、当市教育委員会は61年度にこの他にも2つの発掘調査があり、大変厳しいスケジュールの中ではありましたが、大きな成果を上げて終了することができました。

今回発掘調査を実施した遺跡は、吉井水上I遺跡と戸口遺跡の2遺跡でした。吉井水上I遺跡では、近世以降の遺物が採集され、また、戸口遺跡にあっては、B地区から古墳時代の土器群、C地区からは平安時代の土器群等が多く出土し、本市の歴史を考える上で貴重な資料を得ることができました。

これらの成果を報告する本書が、研究者のみならず、広く一般の人々に活用され、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められるよう願っております。

なお、この発掘調査に当って、多大な御協力、御支援を賜った県教育委員会、また、計画から調査の実施に至るまで格別の御配意を賜った帝国石油㈱新潟鉱業所及び地元各位、並びに調査に参加された調査員の方々に対し、深甚なる敬意を表します。

昭和62年3月

柏崎市教育委員会

教育長 山田恒義

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県柏崎市大字吉井地内及び同上方地内に所在する西草薙遺跡、吉井水上I遺跡、戸口遺跡、萱場遺跡、鶴巻田遺跡の計5遺跡に対し実施した試掘確認調査及び発掘調査の記録である。
- 2 発掘調査等は、帝国石油新長岡ライン建設事業に伴い、柏崎市が61年度に帝国石油株式会社新潟鉱業所から委託を受け、柏崎市教育委員会が調査主体となって実施した。
- 3 試掘確認調査は、昭和61年7月～8月にかけて、柏崎市高齢者事業団シルバー人材センターの会員から協力を得て実施した。また発掘調査現場作業は、昭和61年10月に地元吉井地区の有志から協力を頂いた。整理・報告作業は、柏崎市西本町3丁目番地内遺跡調査室において、調査担当品田高志を中心に行った。
- 4 発掘調査に伴う出土遺物の注記は、西草薙遺跡（NKN）、吉井水上I遺跡（YMA）、戸口遺跡B地区（TGB）、同C地区（TGC）、鶴巻田遺跡（TMD）として、グリッド名、層位及び遺構名を併記した。但し、試掘確認調査において出土した遺物については、遺跡の名称が定まらなかったこともあって、第2地区出土遺物を（旧）吉井小学校裏遺跡の略号YS-Sを使用し、試掘坑名（略号TP）を付した。
- 5 出土遺物は、一括して柏崎市教育委員会が保存・管理している。
- 6 遺構・遺物の実測・写真撮影及び挿図の作成は、整理員の協力を得て品田が行い、報告書の執筆及び編集も併せて品田が行った。
- 7 発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の諸機関等から御指導及び御助言を賜った。記して厚く御礼を申し上げる。

川又昌延、坂井秀弥、寺崎裕助、三井田忠明、岩間好彦、藤巻正信、岡本郁栄
新潟県教育庁文化行政課、帝国石油株式会社新潟鉱業所並びに同柏崎工場、同新長岡ライン建設事業所、柏崎市史編さん室、柏崎市立図書館、柏崎市立博物館

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 試掘確認調査	2
1 試掘確認調査の経過	2
2 吉井地区	5
1) 調査の概要 2) 出土遺物	
3 上方地区	13
1) 調査の概要 2) 出土遺物	
4 遺跡の取扱い	13
III 吉井地区発掘調査	15
1 吉井遺跡群とその環境	15
1) 位置と地理的環境 2) 吉井遺跡群と歴史的環境	
2 調査	19
1) 調査区と遺跡の名称 2) 調査の経過	
3 吉井水上 I 遺跡	22
1) 遺跡概観 2) 遺構 3) 出土遺物	
4 戸口遺跡	29
1) 遺跡概観 2) 遺構 3) 出土遺物	
IV 総 括	46
1 吉井遺跡群における吉井水上 I 遺跡と戸口遺跡の位置付け	46
2 柏崎平野における古墳時代中期後半～後期末の土器群について	47
引用・参考文献	

図版目次

- 図版1 試掘確認調査 1. 第1地区試掘 2. 第1地区TP-1 3. 第2地区試掘
図版2 試掘確認調査 1. 第3地区試掘 2. 第4地区試掘 3. 第4地区TP-7
図版3 吉井水上I遺跡 1. 調査区南東部 2. SD-3旧用水路址 3. SX-5樹枝敷
遺構
図版4 戸口遺跡 1. B地区(17~18G) 2. B地区(17~18G) 3. B地区第Wb下層(16
~17G)
図版5 戸口遺跡 1. B地区SK-21土坑 2. B地区SD-27溝 3. B地区(19~20G)
調査風景
図版6 戸口遺跡 1. B地区SK-27土坑 2. C地区SD-1溝群 3. C地区SD-2溝
図版7 出土遺物
図版8 出土遺物

挿図目次

- 1 試掘確認調査対象遺跡位置図(1).....2
2 試掘確認調査対象遺跡位置図(2).....3
3 第1、2地区試掘確認調査位置図.....6
4 第1、2地区試掘確認調査
　　土層柱状模式図.....7
5 第3地区試掘確認調査位置図.....8
6 第3地区試掘確認調査
　　土層柱状模式図.....9
7 試掘確認調査出土遺物(1).....11
8 試掘確認調査出土遺物(2).....12
9 第4地区試掘確認調査位置図
　　及び土層柱状模式図.....14
10 柏崎平野地形分類図.....16
11 吉井遺跡群.....17
12 遺跡の概要と調査区.....21
13 吉井水上I遺跡遺構全体図.....24
14 SX-5樹枝敷遺構図.....24
15 吉井水上I遺跡出土遺物(1).....26
16 吉井水上I遺跡出土遺物(2).....27
17 戸口遺跡B地区23G土層柱状模式図.....29
18 戸口遺跡B地区遺構全体図.....31
19 戸口遺跡C地区土層断面図
　　及び遺構平面図.....32
20 戸口遺跡B地区出土遺物(1).....35
21 戸口遺跡B地区出土遺物(2).....37
22 戸口遺跡B地区出土遺物(3).....39
23 戸口遺跡C地区出土遺物(1).....42
24 戸口遺跡C地区出土遺物(2).....43
25 戸口遺跡C地区出土遺物(3).....44
26 戸口遺跡C地区出土遺物(4).....45
27 柏崎平野における古墳時代中期後半
　　～後期末の土器群(1).....48
28 柏崎平野における古墳時代中期後半
　　～後期末の土器群(2).....49

I 調査に至る経緯

昭和61年2月、帝国石油株式会社新潟鉱業所（取締役所長 八木資親）（以下「帝国石油」とする）から、新ガスパイプライン敷設工事に係る事業計画の概要等が、柏崎市教育委員会（以下「市教委」とする）に対して通知された。計画は、「今後の需要増加に対処し、且つ、長期安定供給を確保するために、新たに三島郡越路町大字来迎寺から中頸城郡頬城村大字三分一に至る総延長約63kmに、管径406.4mmのパイプラインを敷設する」というものであった。ルートは、既設の道路下に埋設し、掘削は通常、幅1.2m、深度は農道で管頭0.8m、市道は1.2mであった。これに対する埋蔵文化財包蔵地（周知の遺跡）は、鷹ノ巣長者屋敷遺跡、西草薙遺跡、吉井水上遺跡、（旧）吉井小学校裏遺跡、戸口遺跡、萱場遺跡、鶴巻田遺跡と7ヶ所にも及ぶ遺跡が数えられた。

遺跡取扱事前協議は、両者により、時には新潟県教育委員会（以下「県教委」とする）の指導をあおぎながら、數度にわたって催された。その結果、ルートの変更は不可能に近いこと、掘削の幅及び深度は、工法や法例との関わりで縮小できないことが明らかとなり、結局帝国石油は、対象の全遺跡について、同年4月22日付けで文化財保護法第57条の2の規定に基づく届出を提出するに至った。市教委は、同年4月25日付けで、これに意見書を添付し県教委へ進呈した。意見書では、現地踏査の結果をふまえ、鷹ノ巣長者屋敷遺跡については範囲が不明確で、遺物も採集されなかったこと、及び既に市道によって掘削がなされ、切通しとなっていたことから、本事業が道路下に埋設する以上遺跡に対する影響は考えられないとしたものである。

昭和61年5月8日付けで、県教委から鷹ノ巣長者屋敷遺跡以外は、事前に発掘調査を実施する必要がある旨の通知がなされた。帝国石油は、これを受け、同年5月30日付けで市教委に対し、発掘調査の依頼を行った。当初、協議による合意では、市教委が春期と秋期に2件の発掘調査を予定していたため、夏期に調査期間を設定していた。しかし、補助金問題に絡む国会審議が遅れ、それと連携した春期の事業が夏期まで延長せざるを得ないことが判明し、延長2,100mに達する当該事業を実施するには物理的に不可能となった。また地元から、調査は秋の刈入れ後にという要望もあって調査期間の設定が困難となった。その後、市教委が秋期に予定していた調査が、事業主体の事情により延期となつた。このため当事業を秋期に実施することとなつた。とは言っても、調査対象の遺跡が広範囲にわたり、延長も長いことから、冬期を避けるためにも、また調査経費の節減にも、調査期間を限定する必要にせまられることとなつた。このため両者の協議を行い、夏期に遺跡の実態、とくに範囲と包含層の深度を確認するため、試掘確認調査を実施することで合意した。

昭和61年8月9日付けで市教委は、文化庁長官に対し、文化財保護法第98条の2の規定に基づく、埋蔵文化財発掘調査の通知を行つた。

注) 遺跡の名称や範囲については後述するが、一部調査段階と本報告書段階で異なるものがある。

1:50,000 柏崎

1000 0 1000 2000 3000



第1図 試掘確認調査対象遺跡位置図(1)



第2図 試掘確認調査対象遺跡位置図(2) (国土地理院発行 1/50,000地形図
明治44年測量、昭和43年編集・昭和56年修正)

II 試掘確認調査

1 試掘確認調査の経過

試掘確認調査は、第Ⅰ章に述べた鷹ノ巣長者屋敷遺跡を除く6遺跡を対象とした。試掘調査の方法は、重機によって道路に2×1.5m程度を掘削し、掘削土中の遺物の有無及び層序の確認を目的とした。試掘坑（TP）はその日のうちに復旧する必要があり、1日における調査数は限定された。

昭和61年7月23日、漸く本日から試掘に着手できた。調査は先ず、地元からの要望で日時を限られた第2地区から着手した。しかし、石油資源開発㈱のパイプラインが埋設されている位置の確認に手間取り、本日はTP-1～3の3ヶ所の確認にとどまった。層序は3ヶ所とも様相が異なり、上層はかなりの攪乱や盛土がなされていた。TP-3は、旧用水路の一部に相当するらしく、覆土中からは多量の近世陶磁器等が出土した。24日は、TP-4～7及びTP-34を試掘する。全ての試掘坑から土師器等の遺物が出土し、またTP-4～7は、層序に亂れもなく、黒灰色の明確な包含層が存在した。

7月25日、本日から第1地区（西草薙遺跡）の試掘に着手する。付近一帯の水田からは中世～近世の陶磁器類が、比較的多く表採できた。TP-1～3の3ヶ所を試掘した。TP-1～2では包含層と若干の遺物が検出されたが、TP-3は皆無であった。26日、TP-4～7の4ヶ所を試掘した。TP-5は、深度1.8mまで掘削したが、やわらかな明灰色粘土層のみであった。TP-4、6～7から、包含層は確認されなかった。28日、TP-8～9を試掘する。TP-8は、TP-6等と同じであり、TP-9は、1.5mの盛土下に灰色粘土層が検出されたが、ソフトで崩れやすいため、写真撮影直後に埋め戻した。

第3地区は28日に第1地区終了後重機を移動し、TP-1の1ヶ所を試掘した。道路面下1.9mで包含層上面に達し、厚さ20cm程の包含層から多量の平安時代の遺物が出土した。しかし、時は既に夕刻となり、復旧作業のため、遺物の一部を採集したにとどまった。29日、TP-2～4の3ヶ所を試掘した。道路面下1.7～2.0mで地山層が確認され、その直上に10cm前後の包含層が認められた。30日、TP-5～7を試掘したが、前日同様の深度から平安時代の遺物が比較的まとまって出土した。31日は、TP-8～10を、8月1日はTP-11～12を試掘したが、2m程試掘しても、遺物は確認できなかった。

8月2日、重機を移動し、第4地区的試掘に着手した。本日はTP-1～4を試掘し、4日は、TP-5～7を試掘した。深度2m以上にわたってやわらかい粘土層が認められた。TP-5～7からは黒褐色の包含層らしい粘土層が、比較的浅いところで確認された。しかし、検出された遺物は、磨滅した土器2点のみであり、また地山的な層が認められず、遺跡は2mの深度では認められないものとおもわれた。

2 吉井地区

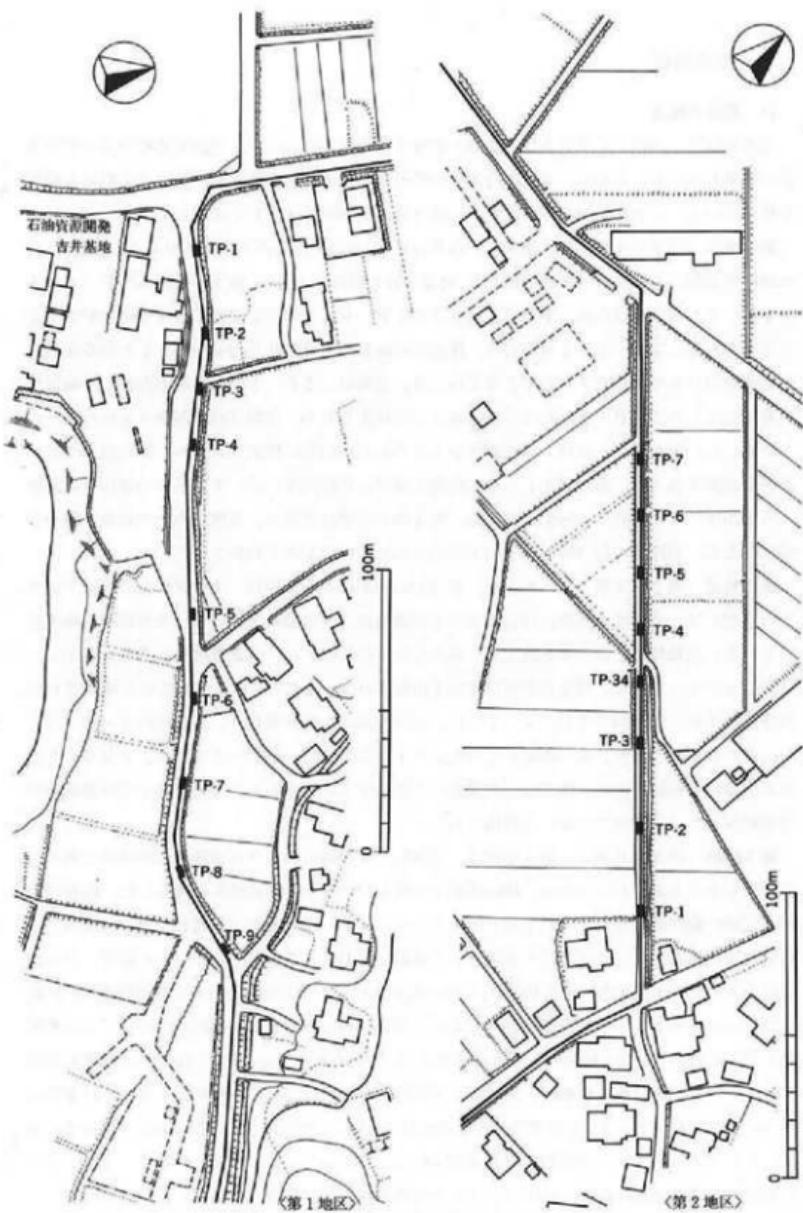
1) 調査の概要

吉井地区は、市内でも最も多くの遺跡が密集する地区的ひとつで、当該事業では5ヶ所の遺跡が関係していた。しかし、各遺跡は互いに隣接するため、その境界については不明確な箇所を伴っている。このため試掘確認調査は、路線別に3地区に区分して実施した。

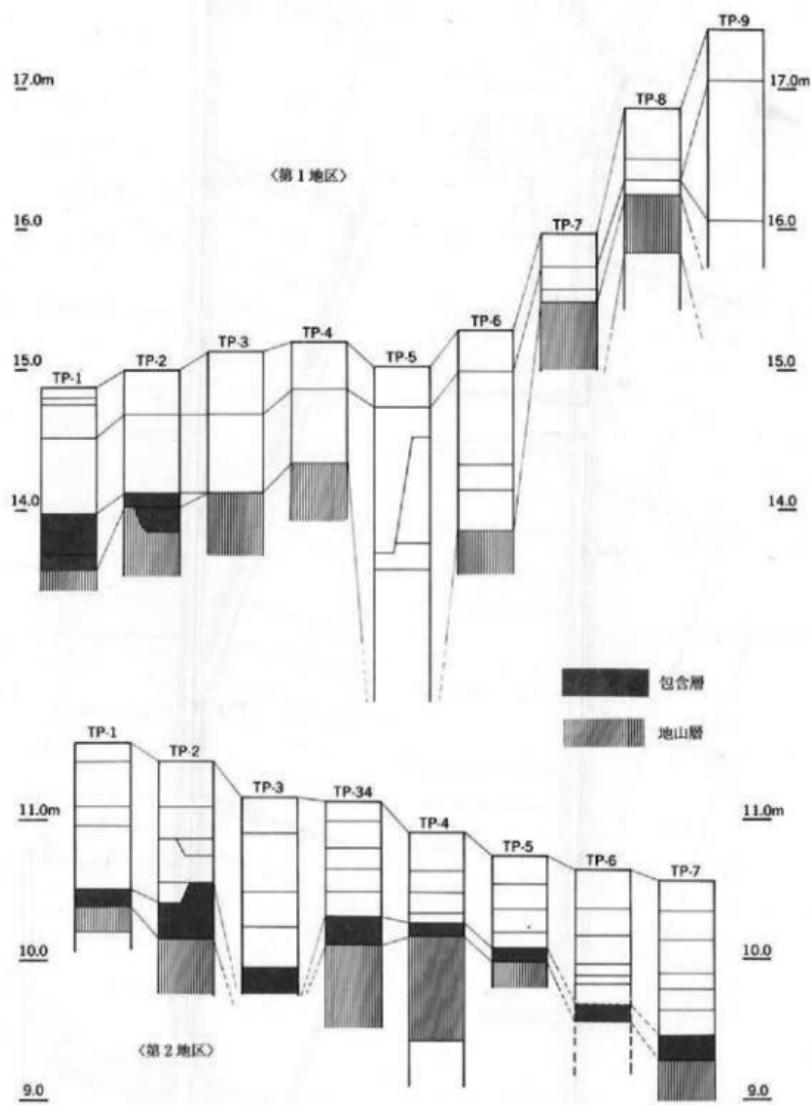
第1地区（第3～4図） 本地区は、市道12-104号線に係る西草薙遺跡である。試掘坑は、西端の県道際から都合9ヶ所を試掘した。確認された層序によると、地下の様相はTP-1～4とTP-7～8に分けられ、TP-5～6及びTP-9は、沢内を流れ下る流水路に相当すると考えられる。TP-1～4の周辺は、現在の石油資源開発吉井基地を中心とした西草薙遺跡の主体部のひとつに相当するものと考えられる。遺物は、TP-1から珠洲系陶器や土師器片が若干出土した。TP-2からは、浅い落込みを検出したが、遺物は細片が極少量出土したのみであった。TP-7～8は、比較的浅いところから地山層が検出されたが、包含層ではなく、遺物も皆無であった。地山層とした青灰色粘土層は、比較的厚いが、TP-6の地山層に連続する地山層がまだ存在する可能性はある。第4図の土層柱状図は、試掘坑の中で最良の箇所を図化したが、道路下の包含層は、その大半が失われているものと判断された。

第2地区（第3～4図） 本地区は、県道中田刈羽線から市道11-4号線に至る農道である。この沿線には、吉井水上遺跡、(旧)吉井小学校裏遺跡、戸口遺跡が分布し、その範囲が絡みあっていた。試掘坑は、8ヶ所を設定して調査した。結果的には、全試掘坑から遺物が出土し、比較的まとまっていた。遺物包含層は深度1m前後の浅いところに存在することが確認された。層序は、TP-1～34とTP-4～7では、その様相がかなり異なり、2者に区分可能となつた。また前者の土層は、北へ傾斜していた。以上のことから、TP-1～34は、少なくとも吉井水上遺跡の領域であり、後者は戸口遺跡へと連続すると考えられ、(旧)吉井小学校裏遺跡は、当該路線部までは伸びていないと判断された。

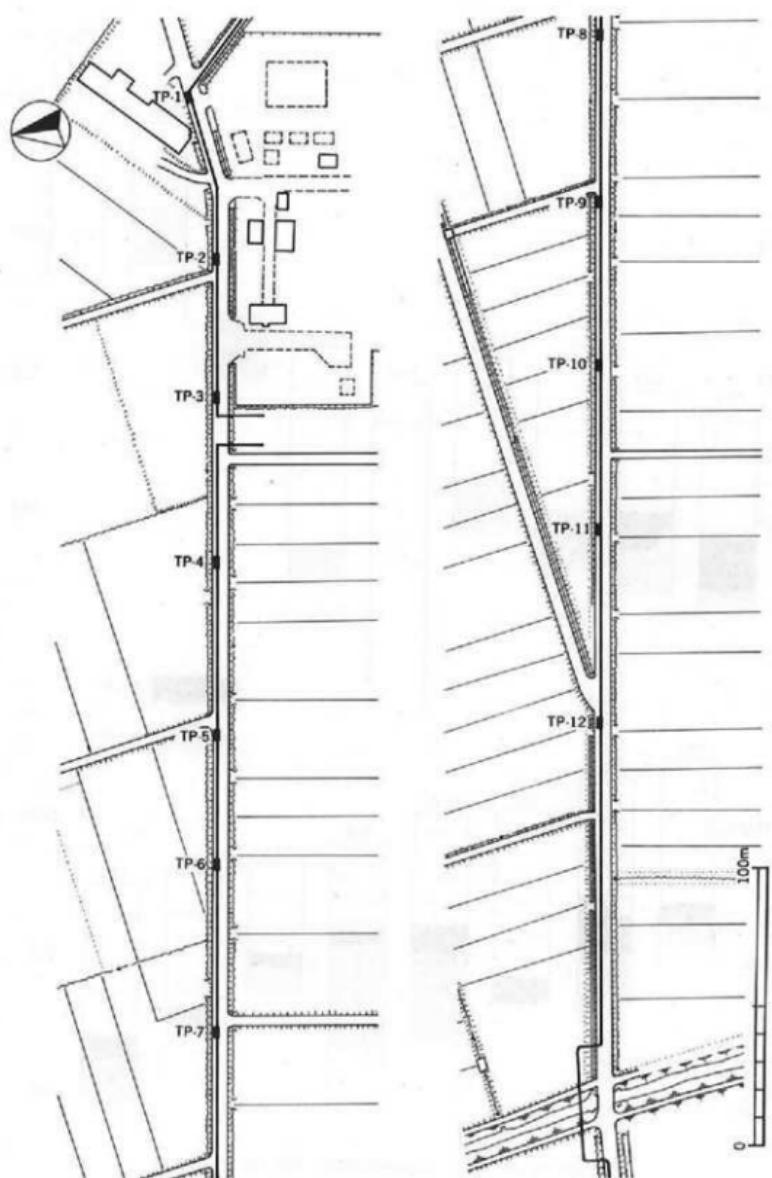
第3地区（第5～6図） 第3地区は、市道11-4号線に係る戸口遺跡、萱場遺跡である。総延長がかなりあったことから、60m間隔を原則として12ヶ所の試掘坑を調査した。調査では、戸口遺跡の範囲確認をひとつの主要目的としたが、TP-1～8まで連続して黒色粘土層による包含層が確認され、平安時代を主体とした遺物がTP-7まで出土した。この結果、戸口遺跡は、TP-1から少なくとも400m近く西へ延びているものと推定された。萱場遺跡は、試掘坑で言えば、TP-8～12に概ね相当するが、第6図のように地山面が明確でなく、また腐植粘土層が存在している。昭和57年の萱場遺跡では、地点が異なるが、標高5m前後に包含層が存在しており（品田ほか、1985b）、本路線まで遺跡の延長はないものと判断される。戸口遺跡については、TP-1～3は、包含層が標高8m前後と高く、地山層とした粘土層は、黄褐色系を呈していることから、この範囲を戸口遺跡本体部としておきたい。しかし、TP-4～7までの範囲は、遺物が比較的多く出土することから隣接地とし、今後の検討部分としておきたい。



第3図 第1、2地区試掘確認調査位置図 (1:2,000)

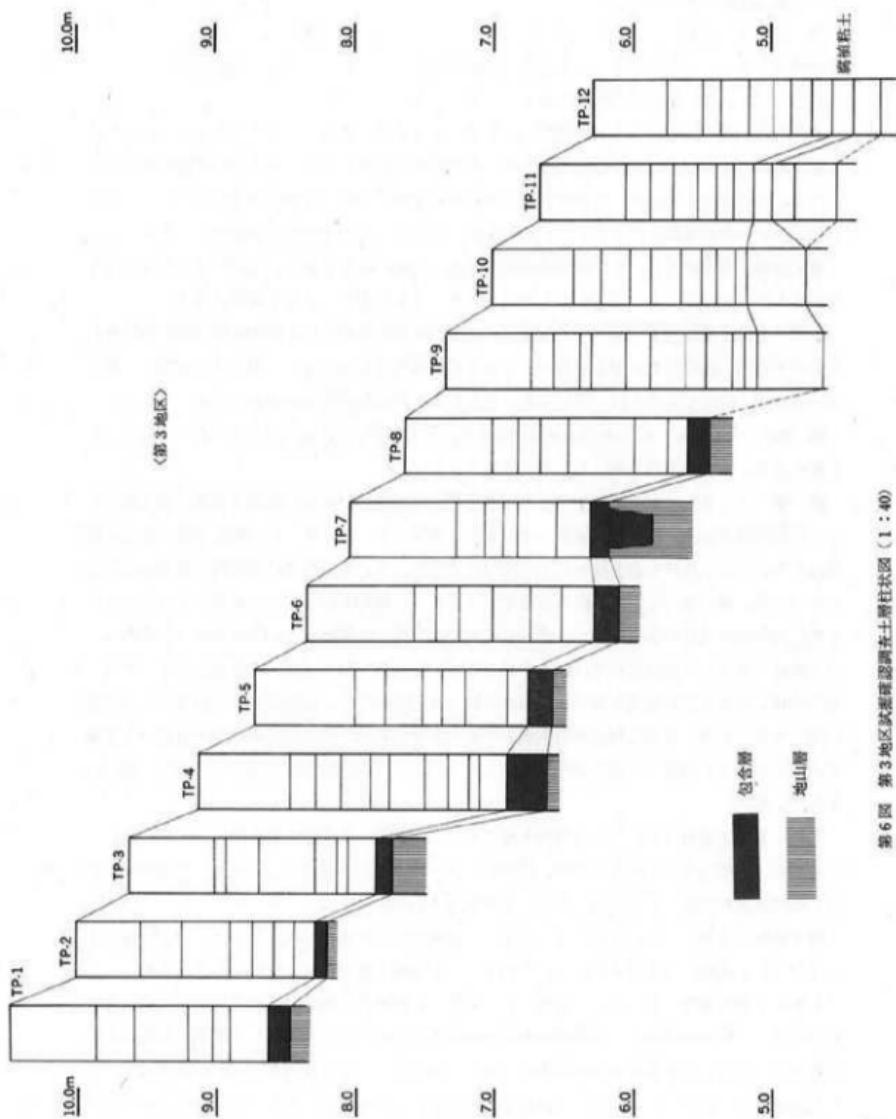


第4図 第1地区、第2地区試掘確認調査土層柱状図 (1:40)



第5図 第3地区試掘確認調査位置図 (1 : 2,000)

第6圖 第3地區沉積岩土層柱狀圖 (1 : 40)



2) 出土遺物（第7～8図）

出土遺物は、試掘ということもあって量的には少ないが、第2地区と第3地区からの出土が比較的まとまっていた。しかし、重機による掘削であったためか、図示の可能な資料は少なかった。以下、各地区毎にその概略を述べることとする。

第1地区 本地区における出土遺物は、TP-1とTP-2の2ヶ所と少なかったため、出土量は非常に少なく、図示可能なものもほとんど認められなかった。2ヶ所の試掘坑から出土した遺物は、全て土器類で、平安時代の土師器・須恵器と中世の珠渦系陶器であった。この他に周辺地区の表面採集を行ったが、沢左岸に沿って中世～近世の陶磁器が散布していた。

第2地区 本地区では、8ヶ所の試掘坑全てから遺物が確認されているが、細片が多く図示可能なものは少なかった。図示したものは、TP-3及びTP-6出土遺物である。

TP-3出土遺物（1～8） 本試坑は、昭和30年頃に実施された圓場整備段階に埋戻された旧用水路内に相当する。出土遺物は、それ以前に廃棄されたもので、板ガラスや空ビン類も伴っていた。図示したものは、これらのうち近世～近代の陶磁器類を中心とした。

陶器（1） 図示した1点は唐津系の皿と考えられるが、高台高が3.5cmと高い。釉は、灰茶褐色を呈し、高台裾部を除いた全面に施釉されている。

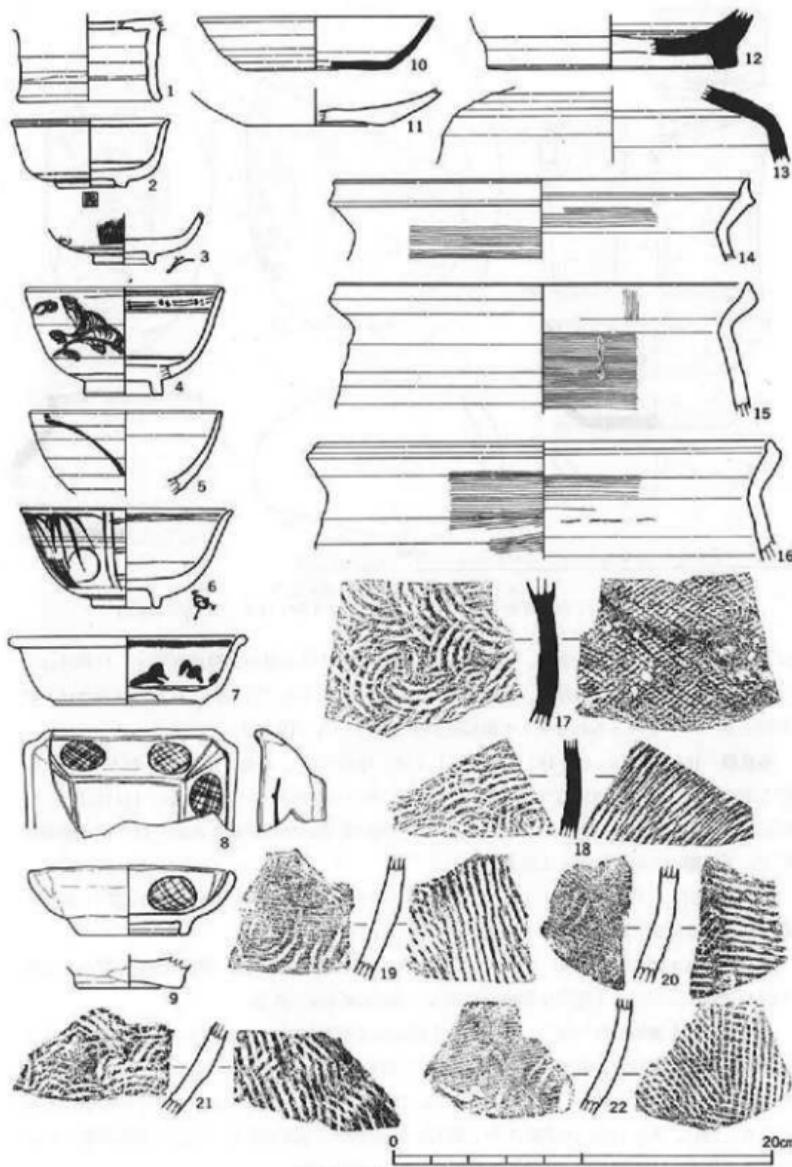
磁器（2～8） 肥前系が大半を占めると考えられるが、新しい時期では瀬戸系も流入していた可能性がある。器種は、碗類（3～6）と皿類（2、7～8）とに概ね分類される。碗類のうち、3が上縁付であるほかは全て染付けである。3、6の高台には砂粒の付着が認められる。4は、細い線によって文様の骨格を描いており、時期的には新しいと考えられる。また、6は、白色地に染付の青が鮮明で、器形からもかなり新しい部類に入いるであろう。皿類は、全て染付である。2は皿にしては器形が異なるが、高台は内削ぎの蛇ノ目高台である。7は、玉縁を模したような口縁部を有する。高台は蛇ノ目凹形高台で、18世紀後半に出現して19世紀に盛行したもので、本例も19世紀前半頃の所産と考えられる。内面見込みに蛇ノ目釉ハギが施されている。8は角皿で、角部分をやや凹ませている。二次焼成を受けたのか、釉の一部が白濁している。

TP-6出土遺物（9） 平安時代と考えられる土師器・須恵器が若干出土したが、目につくものは、古墳時代の土師器である。図示したものは、その一部だが、この他に丸底風の壺底部や高環坏部片が出土している。9は、壺の底部である。

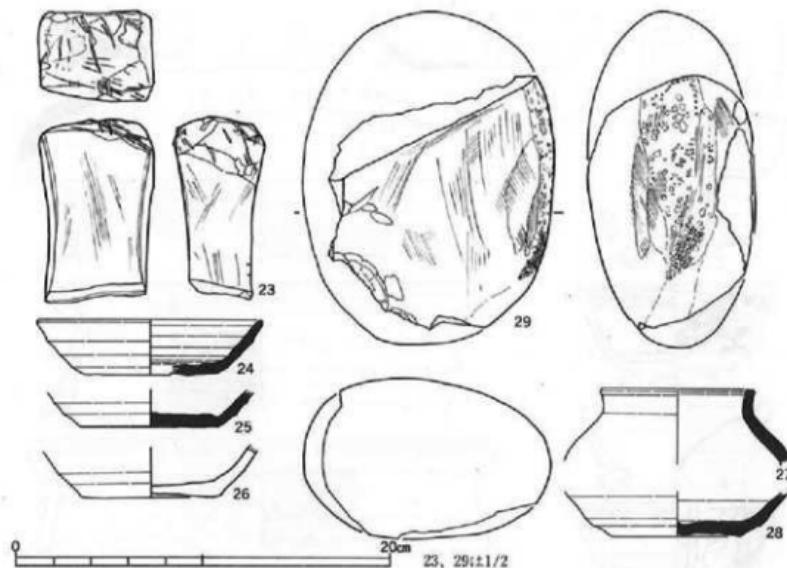
第3地区 本地区では、TP-1～7まで、比較的多くの遺物が出土したが、図示可能なものは少ない。遺物の大半はTP-1から出土した土師器や須恵器で、他に砥石等が認められる。

TP-1出土遺物（10～23） 遺物は、土器類と石器類に大別され、前者には土師器と須恵器がある。これらの遺物は、試掘坑底面の50cm四方から出土したもので、比較的一括性の高い資料と考えられ、出土状況から遺構内に一括して出土していた可能性も十分に存在する。

土師器（11、14～16、19～22） 酸化焰焼成されたものを一括したもので、須恵器的技法で製作されたものを除くと11のみとなる。11は壺あるいは壺の底部であるが、磨滅が著しい。14～16



第7図 試掘確認調査出土遺跡(1)
1~8(第2地区TP-3)、9(第2地区TP-6)、10~22(第3地区TP-1)



第8図 試掘確認調査出土遺物(2)

23(第3地区TP-1)、24~26(第3地区TP-4)、27~28(第3地区TP-5)、29(第3地区TP-7)

は、ロクロ成形による壺である。内面あるいは外面にはカキ目状の調整痕を残す。口縁部はくの字状を呈し、口唇部は肥厚し、内傾したやや幅広の面を有している。これらの胴部には、須恵器と全く同一と考えられるタキ整形痕が施されている(19~22)。

須恵器(10、12~13、17~18) 器種としては、壺類(10)、壺類(12、13)、甕類(17~18)に大別される。10は、口径12.4cm、器高2.7cmを計り、全体的につくりが薄い。12は壺底部で、高台は若干内接する。13は、壺肩部であるが、色調は暗赤灰色と特異である。17~18は甕胴部片で、土師器のそれとほとんど変わらない。

磁石(23) 白色を呈したもので、下半を欠損するが、欠損部にも使用痕が認められる。頭部には、金属器による切込みが、無数に認められる。

TP-4出土遺物(24~26) 24~25は須恵器環、24は口径12.0cm、器高3.0cmを計り、つくりはやや厚い。26は、土師器小形甕の底部で、底径は6.6cmである。

TP-5出土遺物(27~28) 図示した土器は全て須恵器である。27は、口径約8cmを計る短頸壺口縁部、28は、环底部で、底径は6.8cmである。

TP-7出土遺物(29) 本試掘坑から、29の1点のみが出土した。このため時期は不明である。29は、丸い河原石を利用した、磨石と敲石兼用の石器である。欠損、剥落が著しいが、破口等が磨滅しており、欠損後も使用されていたようである。

3 上方地区（第4地区）

柏崎市大字上方地区は、柏崎平野の西部、鶴川下流域左岸に位置する。昭和53年に北陸高速道路建設に先立ち、西田遺跡、鶴巻田遺跡、桐山遺跡の3遺跡が県教委によって調査されている。今回、試掘調査の対象となった鶴巻田遺跡が含まれているが、高速道橋脚部の調査において、かなり深いところに遺物包含層が確認されていた。試掘箇所は、県教委調査区の北西方の農道であった。

1) 調査の概要（第9図）

調査は、高速道路側から始め、合計7ヶ所を試掘した。対象地区は、中央を北東に流れる小流によって東西2地区に区分が可能である。東地区は、4ヶ所に試掘坑を設定したが、内部は灰色の非常にやわらかい粘土が堆積していた。色調の相違から数層に区分したが、西へ行くほど、区分が密になっていた。TP-3で、この状況が著しくなったため、TP-4を試掘したが、意に反し、再び軟弱な堆積層となつた。遺物は全く検出されず、包含層も地下2m前後までには存在しないことが確認された。

西地区は、3ヶ所の試掘坑を調査した。地下1m以内に暗灰色を呈する包含層らしき層が確認され、遺物の検出に全力を注いだが、磨滅した土師器片が2点出土したのみであった。包含層らしき層は、流込み等によるものと判断され、少なくとも工事深度に遺物包含層は存在しないと判断された。

2) 出土遺物

上述のように土師器2点が出土したが、磨滅の著しいもので、図示はできなかった。

4 遺跡の取扱い

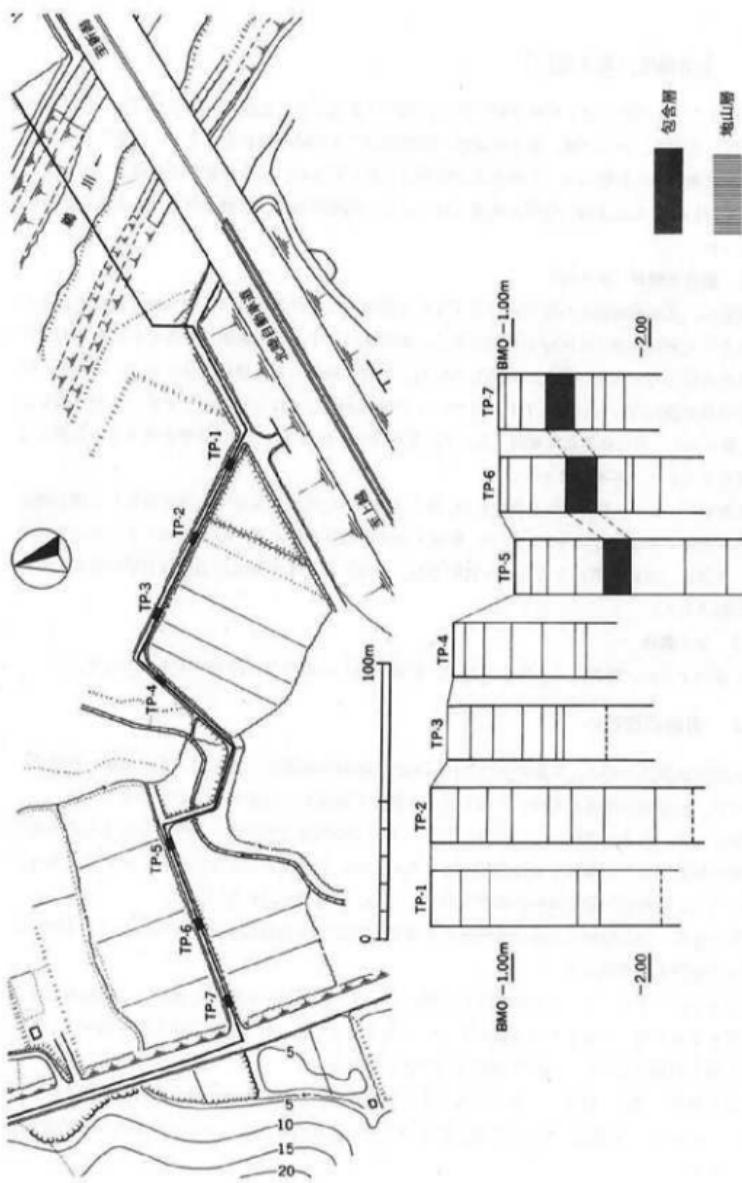
試掘確認調査の結果、下記のとおりに各地区の遺跡を取扱うこととなった。取扱い協議については、県教委の指導を受け、帝国石油と市教委で協議し、合意したものである。

第1地区 西草薙遺跡については、TP-1～2の県道付近には、わずかではあるが遺物包含層が確認され、工事による掘削深度より浅いため、立合調査とする。但し、その他の箇所については、遺物包含層や遺物が確認されないため、調査等は行わない。

第2地区 全試掘坑から遺物が出土し、遺物包含層が工事掘削深度より浅いため、本地区全域は発掘調査を実施する。

第3地区 TP-1～7の区間から遺物が出土するが、遺物包含層が、路面下2m前後と深くに存在するため、工事における掘削をこの上面まで止め、包含層を可能な限り傷めないように工事を実施するとし、この区画は立合調査区域とした。

第4地区 調査の結果、少なくとも工事による掘削深度内においては、遺物包含層が存在せず、工事によって遺跡に及ぼす影響が極端に小さいと考えられることから、調査等は実施しないとした。



第9圖 第4地区試掘孔位置図及柱状図

III 吉井地区発掘調査

1 吉井遺跡群とその環境

1) 位置と地理的環境（第10図）

吉井遺跡群は、新潟県柏崎市大字吉井地内に所在する。吉井地区は、柏崎平野東部に位置し、市内でも遺跡の密集する地域として知られている。

柏崎平野は、新潟平野と高田平野とに狭まれた小規模な臨海沖積平野である。沖積地は、三方を山地・丘陵に囲まれ、北西方の日本海に開口するが、荒浜砂丘によって海と隔されている。主要河川は、西部の鶴川と東部の鮒石川及びその支流別山川である。鮒石川は、鶴川に比して土砂の流出が多く、下流域には多くの自然堤防を形成するとともに、周辺の沖積地は、鶴川流域より数m高くなっている。

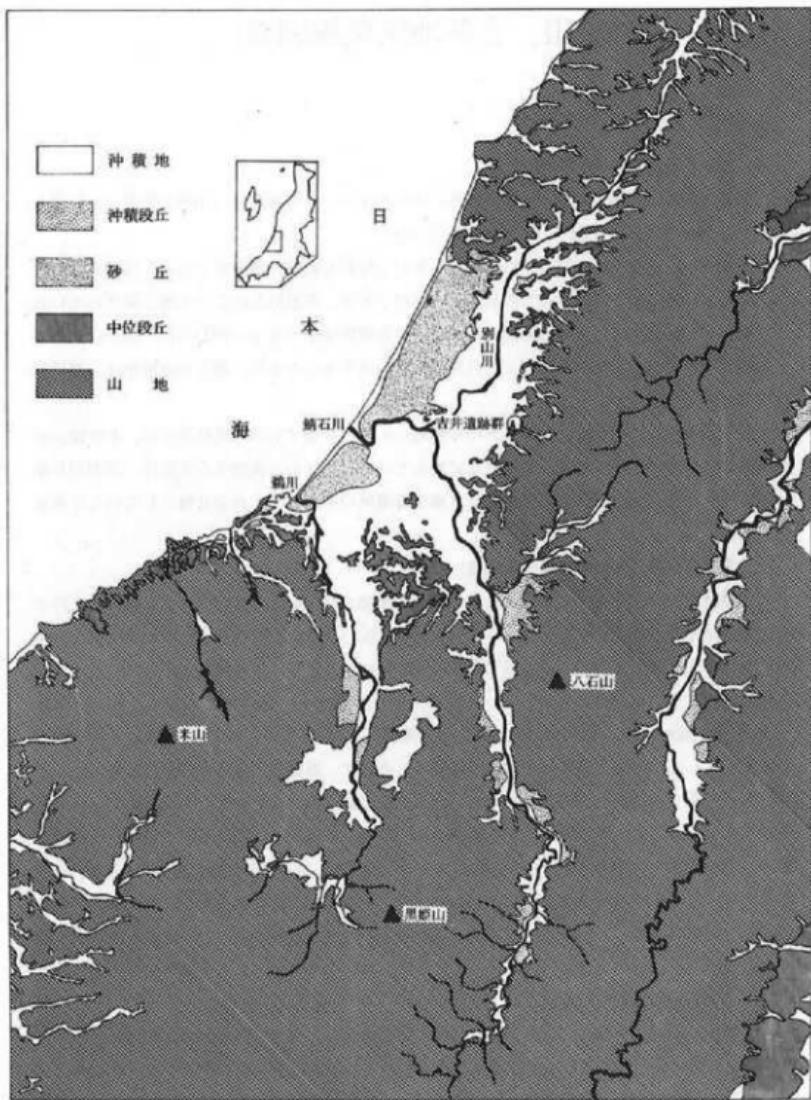
吉井遺跡群は、曾地丘陵の西北辺から沖積地にかけて分布する。丘陵縁辺には、中位段丘が形成されているが、小谷がこれを樹枝状に刻んでいる。ここから流出する土砂は、別山川左岸一帯の所々に微高地を形成し、沖積地に立地する遺跡の多くは、これを基盤としていると考えられる。

2) 吉井遺跡群と歴史的環境（第11図）

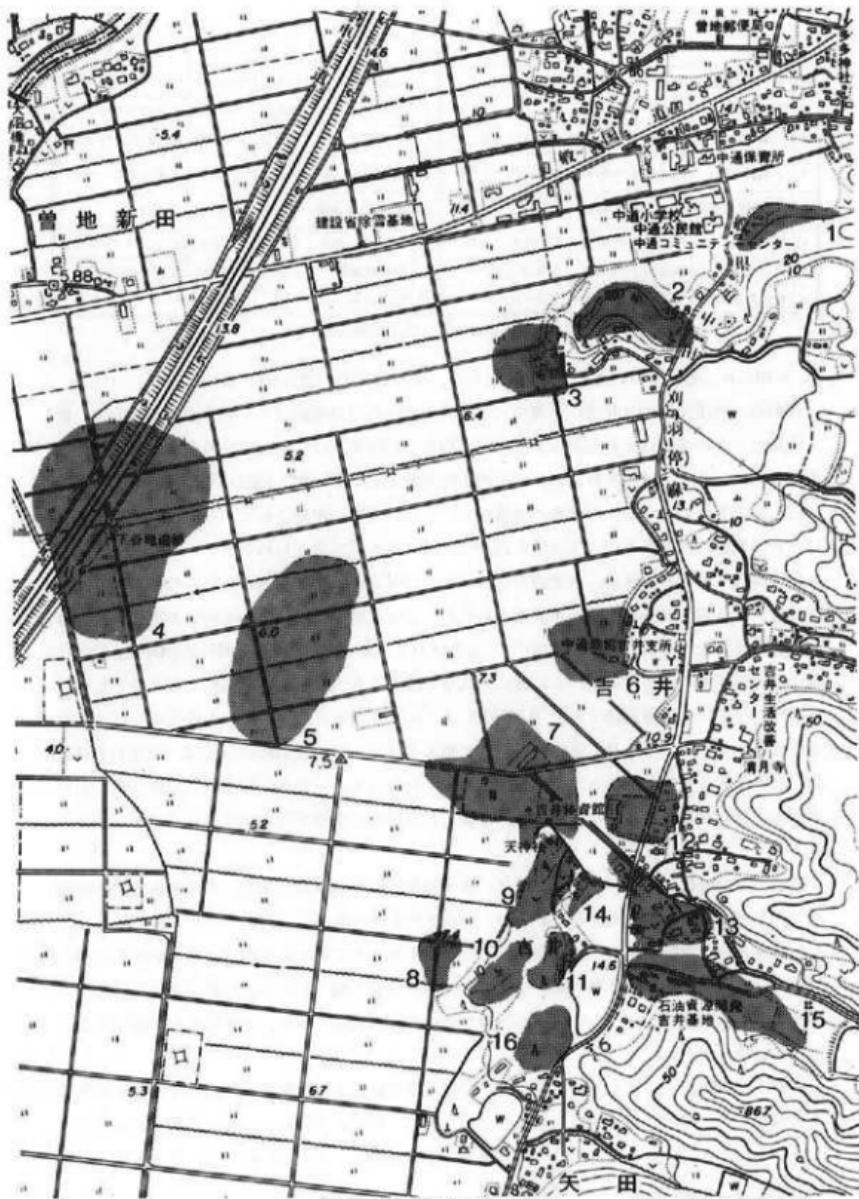
吉井遺跡群では、現在までに20ヶ所近い遺跡が確認されている。種別では、集落跡を主体とし、城館跡や塚（群）等が含まれ、バラエティーに富む。時代的に観れば、旧石器時代～縄文時代前期は未確認であるが、縄文時代中期以降近世に至るまではほぼ連続している。

縄文時代 当時代の遺跡としては、西ヶ峯一帯に分布する4遺跡が確認されている。4遺跡とは、赤坂遺跡（11）、天神社遺跡（9）、西ヶ峯遺跡（10）、吉井水上遺跡（14）で、狭い範囲に密集している。地点を異にして遺物が確認される度に、短絡的に遺跡と称した結果で、本項では西ヶ峯縄文遺跡群と仮称しておきたい。西ヶ峯で確認された遺物は、中期中葉から後期前葉に至るものである。周辺に所在する遺跡としては、中期後半では岩野遺跡（関他 1980）が、東方3kmの別山川右岸に存在する。末葉段階では、南南西1.5kmに三遺跡が所在するが、西ヶ峯からは未検出の時期である。後期初頭から前葉にかけては、比較的多くの遺跡が確認されているが、主要な遺跡としては、北方5.5kmに野崎遺跡がある。後期初頭は、所謂三十船場式土器の時期であるが、この土器は、野附遺跡（5）や権田町遺跡（8）という沖積地の遺跡からも少量ではあるが出土している。

弥生時代 中期後半は、柏崎平野における主要3遺跡のうち2遺跡が本遺跡群内に所在する。2遺跡は、下谷地遺跡（4）と野附遺跡（5）である。前者は、墓域を含んだ集落跡と考えられ、土器を主体とした多くの遺物の中で、玉造関連資料が注目される。後者では、確定はできないが、方形周溝墓が検出されている（品田他 1985a）。この他では、小丸山遺跡（品田他 1985



第10図 柏崎平野地形分類図 (1 : 200,000)



第11図 吉井遺跡群（範囲は推定）

（昭和全國1/10,000その2）
（撮影、昭和58年を使用）

No	遺跡名	種別	立地	時代	No	遺跡名	種別	立地	時代
1	杉ノ木田B遺跡	包蔵地	沖積地	古代～中世	9	天神社遺跡	包蔵地	中位段丘	縄文時代（後期）
2	行塚の塚群	塚	中位段丘		10	西ヶ峯遺跡	包蔵地	中位段丘	縄文時代（後期）
3	行塚遺跡	集落跡	沖積地	古墳（前）、平安、江戸	11	赤坂遺跡	包蔵地	中位段丘	縄文時代（中・後期）
4	下谷地遺跡	集落跡	沖積地	弥生時代（中期）	12	吉井水上I遺跡 (田舎井小学校裏庭)	集落地	沖積地	古墳（後）～中世
5	野附・萱場遺跡	集落跡	沖積地	弥生（中）、古墳（中）、平安・平定	13	吉井水上I遺跡	包蔵地	沖積地	江戸時代
6	礼坊遺跡	集落跡	沖積地	古墳時代（中期）	14	吉井水上II遺跡	包蔵地	沖積地	縄文時代（後期）
7	戸口遺跡	集落跡	沖積地	古墳（後）、平安、江戸	15	西草薙遺跡	包蔵地	沖積地	平安～江戸時代
8	柴田町遺跡	包蔵地	沖積地	平安～江戸	16	吉井百塚	塚	中位段丘	

吉井遺跡群遺跡地名表（第11回掲載分のみ）

b) が知られ、海浜部に位置していることから、下谷地等との関係が注目される。

後期は、当遺跡群では非常に希薄で、今回調査された戸口遺跡（7）のB地区において、極く少量の土器片が確認されたのみである。当期とくに後半期は、中位段丘等の台地上に集落を形成する例が多く、柏崎平野においても西山町内越遺跡（横山他 1983）や西岩野遺跡（品田 1987）が調査されている。沖積地の遺跡については、実態が把握されていないが、本遺跡群では、戸口遺跡の西北西方向、下谷地に向かうラインが有望と考えられる。

古墳時代 前期の遺跡は、本遺跡群では少なく行塚遺跡（3）が掲げられるのみである。遺構に伴い管玉製作に係る碧玉が多数出土したが、この遺構が工房址であるかは不明である。行塚遺跡の後背である台地上には行塚（2）と称される塚が存在する。『新潟県遺跡地図』では行塚1基のみ記載されているが、この他にも数基が確認され、行塚遺跡と関わりがあるとしたら面白い。中期は、萱場遺跡（5）、礼坊遺跡（6）が存在する。後者の浅い土坑内からは、多量の炭化物を伴い多くの土器と鉛滓状の遺物が検出されている。後期については、吉井水上II遺跡（12）から少量の土器と須恵器が出土していたのみであったが、今回戸口遺跡（7）から中期～後期初頭の土器群が検出され、今後これら遺跡の実態が明らかにされてくると考えられる。

奈良・平安時代 柏崎平野においては、9～10世紀代の遺跡数は多く、吉井遺跡群では沖積地であればどの遺跡からも確認されるが、反面その前後の時期は、遺跡がほとんど知られていない。9世紀に遺跡数が増加し、面的広がりを呈するようになった原因は、9世紀前葉に古志群から分離・独立した三島郡の成立（米沢 1980）に深く関係したものと推定される。11～12世紀における遺跡について、実態が不明確なのは全国的動向であり、本地域もその渦中にあったことは確かである。

鎌倉～江戸時代 吉井水上II遺跡からは、溝に囲まれた中に建物址や井戸址及び土壙墓等が多数確認され、遺物でも本製品が多数出土している。集落跡では、この他では実態が明らかでない。曾地丘陵には、山城として矢田城や菊尾城が近在し、中位段丘上には、行塚（2）や吉井百塚（16）が確認されている。

2 調査

1) 調査区と遺跡の名称

調査区は、試掘確認調査時の第2地区と、バルブステーション建設予定地である。前者は、ほぼ直線の農道であったため、南東端の県道際を起点として10m毎に区画を、2m毎に5小区画を設定、1①G、2③G、3⑤G……等と呼称した。また農道中央に橋があり、南東側をA地区、北西側をB地区、バルブステーション建設予定地をC地区と呼称した。

遺跡の名称は、A地区を「吉井水上I遺跡」と呼称することとした。当初「吉井水上遺跡」と仮称したが、別地点に同名の遺跡があるため改称した。また「(旧)吉井小学校裏遺跡」は「吉井水上II遺跡」と改称する。両遺跡の境界は、A地区1~3Gにおいて、層序が北西に傾斜し、沢状地形の存在が想定されるため、これを境としたい。またA地区6~8Gにおいては、路面下2mに腐植層が認められるごとく、やはり沢状地形が存するため、この付近を境界として両者を区分することとする。A、B、Cの地区名は、一応踏襲する。

2) 調査の経過

発掘調査は、昭和61年10月6日から同年10月30日までの延19日間実施し、調査面積は延340m²であった。この発掘調査の他に、試掘確認調査段階の第1地区の一部と第3地区に対し、立合調査を併行して行った。立合調査については特に触れないが、調査期間は11月中まで及んだ。発掘調査は、吉井水上I遺跡(A地区)、戸口遺跡B地区、同C地区の3地区に区分して実施したが、本項においては適宜区分して述べたい。

10月2日~4日、プレハブ等の現場事務所を設置し、器材を搬入、調査の準備を行う。これらと併行し、調査区の矢板打ち及び農道盛土除去を行う予定であったが、仮設道路敷設が遅れ、これらについては4日から開始した。

10月6日、本日から作業員が参加、吉井水上I遺跡1~2Gの碎石等除去作業に着手する。碎石や砂利は、地下60cm以下まで食い込み、作業は困難を伴ったが、この作業は8日までには終了した。この過程で、4~6Gにかけて灰色粘土の落込みが検出され、大溝状の遺構かと思われた。これを大溝と仮称し、7日から発掘に着手した。8日、深度は意外に浅く、4Gでは南西方向に穏やかに傾斜していた。遺物では、土築器や須恵器とともに陶器が出土し、近世以降の遺構と判断された。この他に8~10Gにおいても幅1.5m程の溝跡が検出されたが、試掘調査TP-3に相当するものと思われ、9日にはこれを旧用水路として発掘に着手した。発掘は、圃場整備段階の埋土と考えられる層を発掘したが、遺物は皆無であり、TP-3から出土した遺物が、昭和30年頃を下限としたものであることが確認された。13日、3~5Gの黒褐色粘土層を発掘し、また検出遺構の図化作業を行う。10Gは、橋の撤去作業のため立入禁止となったため、戸口遺跡B地区に着手する。14日、A地区(吉井水上I遺跡)は3~6G下層を発掘、6①Gから樹枝を敷き詰めた遺構が検出された。この遺構は、17日に図化作業等を終了、吉井水上I遺跡の調査を全て終了した。

B地区（13～19G）は、13日から碎石等の除去作業に着手し、14日これを終了した。13Gの発掘では、近世の遺物は少なく、古墳時代～中世にかけての遺物を主体としていた。15日、13～19G全区の発掘を行った。18～19Gは黒褐色粘土層（包含層）が厚くなるが、遺物の出土量は、13～16Gのはうが多く、平安時代の須恵器・土師器を中心であった。遺構の検出は、茶褐色砂質粘土層上面を確認面として16日から着手、13～17Gまで概ね完了。20日、18～19Gについても完了したが、検出遺構は、小溝か小ピットが大半であった。本日、C地区に着手する。

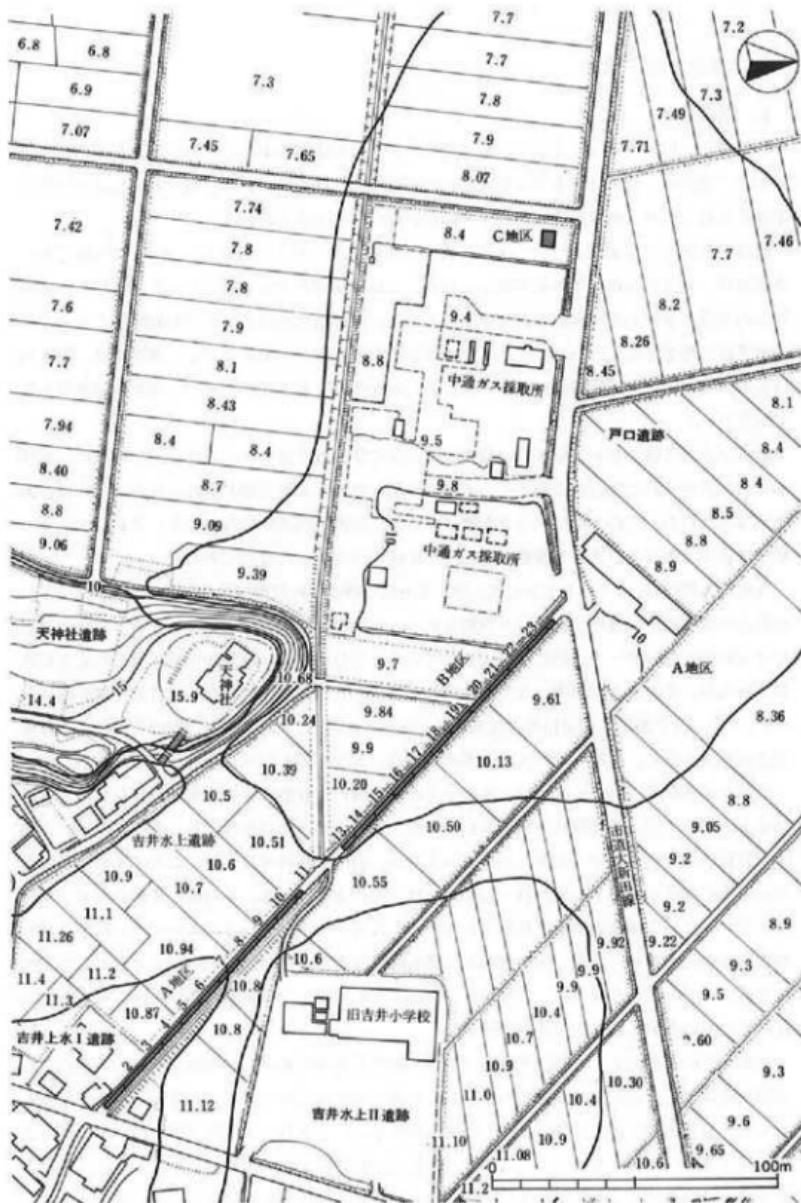
10月21日、A地区ではバイブルайн敷設工事が進められていたが、6～7G付近の路面下2mに黒褐色のカタモ層が確認された。B地区は、南壁の土層図作成に着手、13～15Gまでを終了させ、これと併行して遺構の発掘を行った。16⑤Gで検出されたSK-21は、遺物出土量が多く、また古墳時代の遺構であることが確認された。SK-21の発掘は22日も繼續した。これと併行して、13～16Gで検出された遺構の平面図の作成を行った。

B地区20～23Gは、6本程のガス管等が既に埋設されているということであったため、当初発掘対象から除外していたが、北東側の路肩部分は、盛土内に水道管1本が埋設されているのみであることが判明し、地下の遺物包含層は無傷と考えられた。急遽、帝国石油及び施行業者と協議し、予算の範囲内において4日間で調査を終了することで、本日合意している。

B地区は、23日に第IV層上面の調査を終了させ、24日、第IVa層を発掘、27日までに当初予定の13～19Gについて全工程を終了した。

C地区は、10月20日から着手、22日に包含層に達した。本地区は試掘も兼ねたが、遺物の出土量が多く、完掘することとした。23日、調査区南側に旧用水路と考えられる溝跡群を検出し、発掘する。伊万里焼を中心とする遺物が大量に出土、この他に古墳時代～中世の遺物が混入していた。25日、この旧用水路と、これと重層する溝跡群を完掘、図化後の27日、北側で検出された溝跡の発掘に着手した。本址は、旧用水路と重複する溝跡群に切られており、中世墳の所産と考えられたが、29日の完掘までに遺物はほとんど出土しなかった。29日までに図化作業も終了させ、本地区的調査を完了した。

B地区延長部分（19～23G）は、24日から盛土等の除去作業に着手し、25日、19～20Gの調査を開始した。この付近は、13～17Gより一段低く、18～19G以下から包含層も2枚に分かれることが確認された。両者の間層は、黄褐色粘土層であり、無遺物層であった。上層の包含層（第IIIb層）からは、遺物があまり出土しないが、概ね平安時代と考えられた。27日、22～23Gの発掘に着手、29日には19～20Gの第IVb層上面の遺構確認及び22～23Gの第IVa-2層の発掘を行った。後者からは、古墳時代中期末～後期初頭の遺物が大量に出土した。この土器群は22⑤～23①Gに集中し、一括性が高いが、湧水等により、出土状況を明確にできなかった。30日、昨夜からの豪雨と、工事着工箇所における排水ポンプの故障により、調査区まで完全に水没し、朝からの作業ができなかった。午前11時頃、漸く復旧し、22～23Gの発掘及び遺構確認を再開した。午後、平面図等の作成を行い、調査予定の工程を終了した。夕方、器材を撤収し、現場作業を完了した。



第12図 遺跡の概要と調査区

3 吉井水上 I 遺跡

1) 遺跡概観

本遺跡は、柏崎市大字吉井字水上地内に所在し、吉井集落の中心からややはざれた南側に位置する。遺跡は、沢入口の右岸に形成された沖積地に立地するが、明治44年の更正図では既に宅地とされており、周囲の水田部よりやや高かったものと考えられる。

遺跡の範囲は、西北部については前節で述べたとおりであるが、東半については明確でない。南西部は、北西から南東へ水田が延びており、これを境界とすると考えられる。時期は、A地区から近世の遺物が多く検出されていることから、江戸時代がひとつの中心的時期と言えるが、旧用水路に廃棄されていたという遺物の性格から正確なものとは言えない。調査では、近世のほかに古代～中世の遺物が出土しており、これらを考慮する必要があり、今後の検討事項としておきたい。

調査によって確認された層序は、盛土を除き全て粘土層であった。層序は、上層部には昭和30年頃に造成された現道路の盛土や、道路の原形を形成する粘土層が認められる。これは、道路では当然だが、この下層はかなり複雑であった。試掘確認調査においても、TP-1～3の層序は各々で異なり、地下の様相をほとんど把握できなかったものである。

A地区的層序は、6～8Gにおいて、地下2m程で確認された黒褐色腐植層が示すとおり、この付近一帯は沼状の湿地であったと判断される。その後、青灰色粘土が厚く堆積し、やや平坦になった後に、SR-4道路址が造成されている。この道路は、昭和30年頃に現在のように改良されるが、それまでに幾度となく補修されたとみられ、厚い小砂利を多く含んだ層が認められた。SR-4道路面と現道路面の比高差は1m近くに達し、SR-4が近世の中で収まると推定されることから、周囲における粘土等の堆積は、かなり著しかったものと思われる。

明治44年測図の土地更正図では、SR-4の北東側に比較的大きな用水路が存在したことが図示されているが、第13図に示したSD-3が、この旧用水路に相当する。現用水路は、A地区とB地区の間を横切って天神社の下側へ走るが、旧用水路はSR-4にそのまま沿っており、戸口遺跡C地区に検出されたSD-1aの溝址は、この支流である。この他に6Gのポイント付近から、SX-5樹枝敷造構が検出されている。SR-4との関わりについては、矢板のため層位が不明であるが、SR-4道路面より50～60cmは低く、その位置から道よりも古い可能性がある。なお、4～5Gでは、暗灰色粘土を覆土とした浅くやや平坦な箇所があるが、これは江戸時代頃の水田であった可能性が強い。

遺物は各区から出土したが、SD-3以外は細片が大半であった。種別も土器類、須恵器、珠洲系陶器とともに近世の陶磁器が出土し、近世における擾乱や、流入が著しかったと推定される。土器類の他に溝址に伴って多くの杭が検出された。SD-3旧用水路に伴う杭は直径15cm前後と太い。反対にSD-2、3に伴った杭は、直径5cm前後と細いものであった。両者とも先端を金属器によって尖らせているが、後者は腐蝕の著しいものが含まれていた。

2) 遺構

吉井水上 I 遺跡（A 地区）における遺構の概略については、前項で述べたので、本項では個別の遺構について述べることとする。検出された遺構は、溝址 3 基、道路址 1 基、性格不詳の樹枝敷遺構 1 基の合計 5 基である。柱穴等のピットは、ほとんど全くと言ってよいほど検出されず、一般集落跡とは異った様相が窺え、言わば村はずれ的な地区と考えられる。

溝址 3 基の溝址が検出されたが、用途や機能まで把握できるのは、旧用水路と考えられる SD-3 のみである。また、SD-2 及び SD-3 は、SR-4 道路址に沿うものであった。

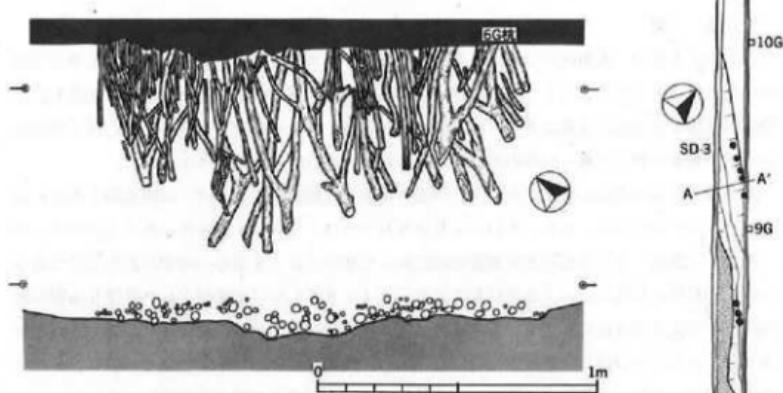
SD-1 溝址 4 ~ 5 G の北東調査区壁に沿って検出され、左壁のみ確認されただけである。このため規模や形態については不明な点が多い。4 ~ 6 G にかけて検出された直径 5 cm 程の杭列は、その大半が本址に伴うものと考えられる。杭の先端は、金属器を使用し、3 ~ 5 回削り尖らしている。この他に遺物は伴っていないため、時期については不明である。但し、SR-4 道路址や、SD-2 溝址よりも古いことは確かで、中世にまで遡る可能性もある。

SD-2 溝址 本址は、3 ~ 4 G 及び 5 ~ 6 G の 2ヶ所から検出された。底部の形態は、SR-4 道路址際にテラス状の段を有している。溝の全幅は、3 ~ 4 G の上流で約 1.8m、5 ~ 6 G の下流では約 2.3m と下流程広くなっている。また一段深い溝の幅は、上流約 1.3m、下流で約 1.0 ~ 1.3m であった。SR-4 道路面からの深度は、下流のテラスで 0.22m、最深部で 0.4m、上流では各々 0.1m、0.3m であった。上流と下流部との距離は約 20m であるが、その間に絶対レベルでは 1 m 程度下流部が低くなっている。覆土は、暗灰色～灰色粘土で、その上層には、やや明るい灰色粘土の自然堆積層が認められ、昭和 30 年頃の工事以前に既に埋設していたものである。出土した遺物は、近世の陶磁器を主体とし、若干量の土師器や須恵器等が伴っていた。本址の時期は、江戸時代においては使用されていたものと推定される。

SD-3 溝址 溝址と言うより、旧用水路と称したほうがよいかも知れない。本址は、8 ~ 9 G にかけて検出された。第 13 図に示した平面図は、概ね昭和 30 年頃の最終段階のものである。左右両壁は、軟弱な地盤のため幾度となく補修されたらしく、直径 15cm 程の杭を両側に打ち込んでいる。断面の観察では、北東壁に厚い覆土が認められるが、覆土の大半は、昭和 30 年頃の圃場整備に伴った埋土であった。遺物は、埋土内からはほとんど出土せず、大半が北東壁及び溝底の覆土内から出土している。また、試掘確認調査 TP-3 出土遺物（第 7 図 1 ~ 8）は全て本址出土と考えられる。この SD-3 旧用水路は、農業用としての機能の他に生活廃棄物の処理が大量に行われており、生活の一端が窺える。時期は、江戸時代には既に使用されていたと考えられるが、その終焉は昭和 30 年頃である。

道路址 道路址は、SR-4 の他に 3 G 付近から南西に延びる路線が、明治 44 年測図の土地更正図に記されているが、これについてでは確認に至らなかった。

SR-4 道路址 本址は、3 ~ 4 G 及び 6 ~ 9 G にかけて検出された。道路幅は約 2.5m 前後で、造成当時は 1.5m ^{程度} 幅を想定していたと推定される。路面には小砂利が敷かれ、かなり固くしまっていた。この路面は、現農道面下 60 ~ 70cm、現水田面からも 30cm は低いものである。

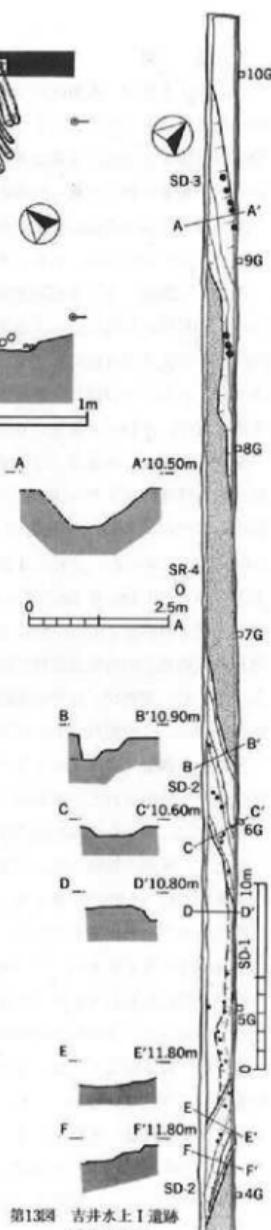


第14図 SX-5 樹枝敷造構

これは、本址の比較的古い姿と考えられ、補修のため、小砂利を数度に除々に高くなり、その分小砂利を含んだ層は厚くなっている。時期的には、江戸時代に既に使用されていたものと考えられるが、原形はそれ以前にあった可能性も存在する。

樹枝敷造構 本址は、5⑤～6①Gに検出されたものである。層位的には、SD-2やSR-4の下層から検出されたもので、中世～近世の所産と言えるが、伴出した遺物はなかった。樹枝は、北東～南西のラインに平行して敷詰められ、また枝先を北東に向け、幹側を南西にと、規則性が認められる。材量は、樹枝としたように、直徑の太い幹と考えられるようなものは使用せず、細い枝材のみによって構築されている点に特徴がある。平面形態については、確認前にその縁辺部を欠損し、明確にできないが、円形もしくは隅丸方形状を呈していたと考えられる。樹枝の敷かれた床面は、軟弱な灰色粘土層であり、沈み込まない足場として利用された可能性が最も強い。

検出された位置は、SD-2溝址左岸にも相当し、これと深い関わりがあったことも考えられるが、SD-2が完掘できず、実態が不明のため確認できない。類例については、管見なく、民俗例等を検討する必要があるが、今後の課題としておきたい。



第13図 吉井水上I遺跡
遺構全体図

3) 出土遺物

吉井水上 I 遺跡（A地区）から出土した遺物は、平安時代～近・現代に至る時期のものが出土した。主体は、近世以降の陶磁器類で、古代～中世の遺物は極く限られている。本項においては、近世の陶磁器類を中心に述べることとしたい。

S D - 2 溝址出土遺物（第15図30～33） 本址からは、平安時代の土師器、須恵器や中世の珠洲系陶器が出土しているが極く限られ、主体的な遺物は近世の陶磁器類であった。この陶磁器は、大半が肥前系と考えられるが、陶器の中には生産地が不明のものが含まれている。図示した4点は全て伊万里染付である。器種は、皿類と碗類に分類される。色調は、明緑灰色を呈するが、31は火を受けたらしい釉が白濁する。胎土は、31がやや白色を呈するが、他は概ね明緑灰色である。胎土中には、極めて微細な黒色粒子が含まれている。

皿 類（30） 高台径6cmを計る底部片である。内面には細い線による文様が描かれる。高台部に砂目痕はない。高台内を含む外面には、貫入が認められる。

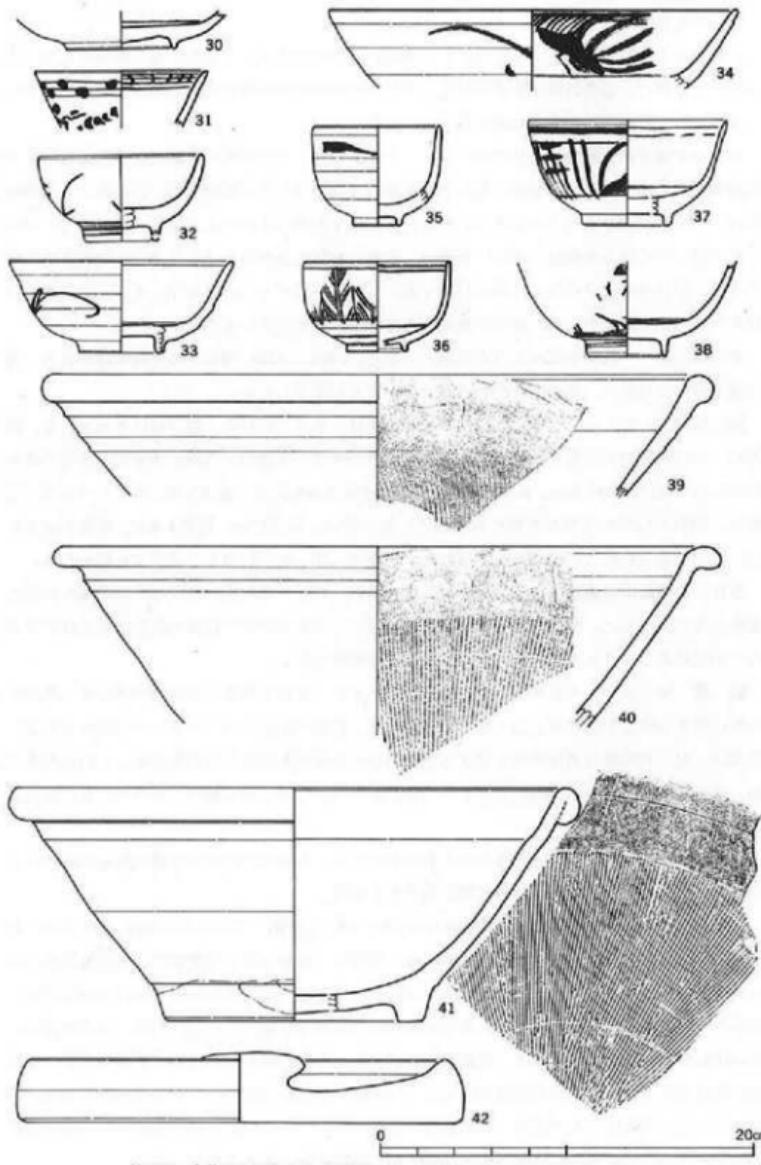
碗 類（31～33） 全て器形が異なり、32は向付とも考えられる。31は口径9cmを計る。器形は、ほぼ直線的に外傾し、口唇部内面がやや外反する。文様は、外面に唐草状の文様が描かれている。32は、口径9cm、高台径約4cm、器高約4.5cmを計る。底部を特に厚くしている。文様は、30例と同類の文様が外面に施されている。33は、口径12cm、底径4.6cm、器高5cmを計る。内面見込みに蛇ノ目釉ハギが施される。文様は、30、33に類似した草状文が描かれる。

S D - 3 溝址出土遺物（第15図34～42、第16図43～44） 本址も、平安時代以降現代に至る遺物が多く出土した。種別も雑多であったが、図示したものは江戸以降の陶磁器を主体とする。大半が肥前系と目されるが、擂鉢や火消壺蓋等は明確でない。

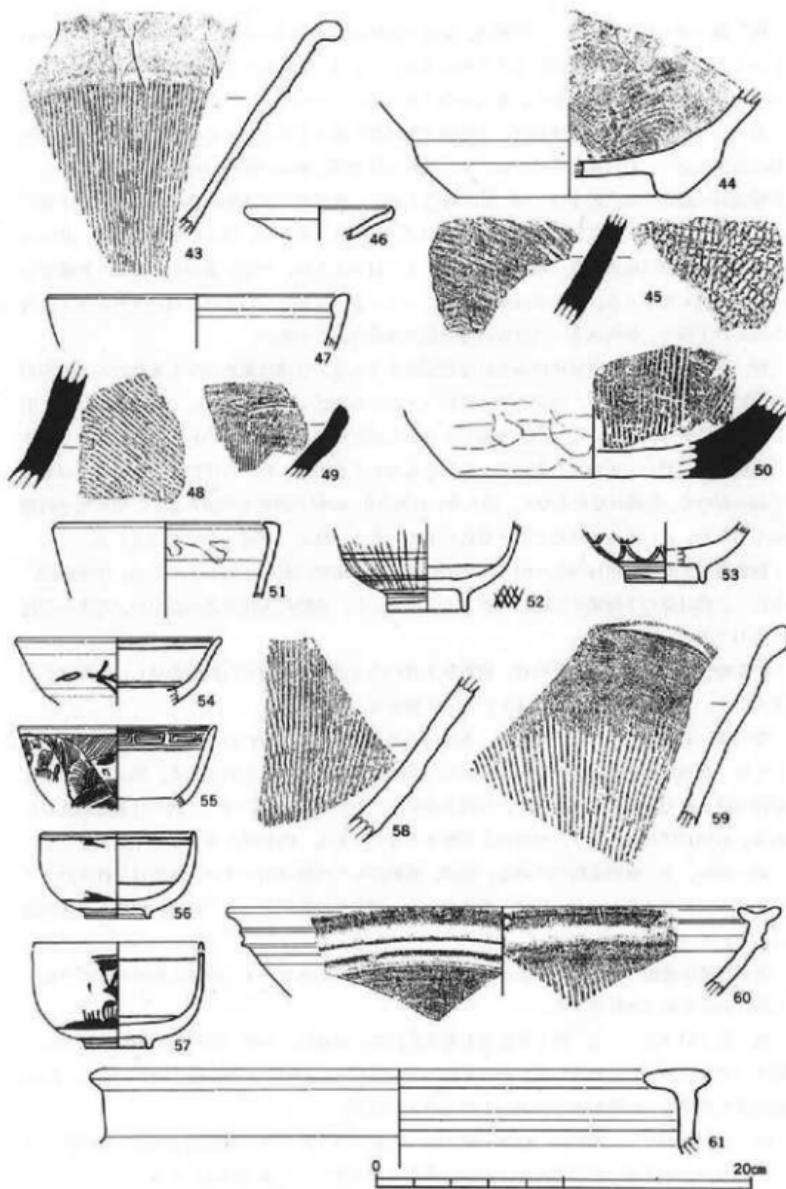
磁 器（34～38） 本址から出土した磁器は、S D - 2 出土磁器とは様相が異なり、規則性のない雑多な感じを受ける。全て染付ではあるが、色調や胎土にバラエティーが認められる。色調は、34、35は概ね明緑灰色を呈するが、35は火を受けたのかやや黄色がかった白色を帯び、36、38は明青灰色、37は灰白色を呈している。胎土は34～36、38は緻密であるが、37は粗く陶器にやや近い。

皿 類（34） 口径22cmを計るやや大形の皿である。外面には線状の文様が簡素に描かれるが、内面には昆虫を感じさせる文様が施されている。

碗 類（35～38） 器形は、丸腰形のもの（35～36）と所謂「くらわんか茶碗」形のもの（37～38）に分類される。35は、口径7cmを計る。外面に一筆書きによる簡素な文様が施されるのみで、時期的にもやや下るものであろう。36は、口径8cm、高台径3.3cm、器高4.9cmを計り、薄手のつくりをしている。文様は、外面に縱位の矢羽状文を施している。37は、口径10.6cm、高台径4.8cm、器高5.6cmを計る。底部は厚くつくられるが、腰から口縁部は薄手である。口縁部は気持ち反り気味で、口唇部は細く尖る。具須は、青色の発色がよく、太目の筆で力強く描かれている。内面見込みに足付ハマ培着痕が認められる。38は、高台径4.2cmを計り、高台端部に砂粒が付着している。内面見込みに手描きによる五弁花文が施されている。



第15図 吉井水上I遺跡出土遺物(1) 30~33(SD-2)、34~42(SD-3)



第16図 吉井水上I遺跡出土遺物(2) 43~44(SD-3)、45~61(包含層)

陶器 (39~41、43~44) 器種は、擂鉢と捏鉢が大半を占められる。時期的にはかなり新しいものが主体で、近・現代に下るものが多い。胎土は、黄橙色～褐色を呈する。またほとんどが施釉されるが、全て鉄釉で、光沢を伴うものとそうでないものがある。

擂鉢 (39~41、43) 擂鉢は、内外面全面に釉を施すもので占められる。39と43は黒褐色、40は褐色に近く、41は褐色を呈する。全て光沢を伴うが、40は内面の口縁部以外は光沢のない鉄釉部分が露出する。胎土は、39、40が橙色を呈し、砂粒等の混入物の様相が42の素焼土器に近く、同じ生産地であった可能性が強い。43は注口部分の破片で、胎土の砂粒等は39、40に近いものの、色調は暗灰褐色～褐色を呈している。41の胎土は、にぶい黄橙色を呈し、均質でなめらかな感じを与える。高台部は削出しによっている。産地については、41が常滑と考えられるほかは不明で、信州あるいは近在の地方窯である可能性が強い。

捏鉢 (44) 高台外縁径12cmを計る底部破片である。色調は褐色を呈し無釉だが、外面や内面に鉄釉が流れている。内面底部付近にハケによる波状文が施されている。高台部は削り出しによっており、またかなり粗雑であることから19世紀頃、肥前で焼かれたものと考えられる。

素焼土器 (42) 火消壺の蓋と考えられるものが1点出土した。口径24cmを計る厚手のもので摘みがつく。色調は橙色を呈し、胎土中には粒径0.5mm程の砂粒を均質に富む。生産地や時期は不明だが、古いものではなく近・現代のものと考えられる。下面是ややすけている。

包含層出土遺物 (第16図45~61) 平安時代以降の遺物が混って出土したため、平安時代、中世、近世以降の3時期に区分して述べることとした。遺物の主体を占めたのは、近世～近代のものである。

平安時代 (45) 図示したのは、須恵器1点のみである。色調は白灰色を呈し、内面は平行文のアテ、外面は格子目文のタタキによって整形されている。

中世 (46~50) 該期の遺物は、素焼の土器と珠洲系の陶器にわけられる。前者のものとしては、46の燈明皿と47の碗がある。46は、黒色を呈したやや薄手の土器で、胎土には微細な砂粒が含まれる。口径8cmを計り、口唇部がやや立上がる。内面にはヤニ状の付着物が認められる。47は口径16cmを計り、口唇部が肥厚するものである。内外面ともかなり平滑にされる。

48~50は、全て珠洲系陶器である。48は、甕胴部で内面は指オサエ、外面は平行文のタタキによって整形される。49~50は、擂鉢である。49はやや粗雑だが、口唇部の形態から比較的古いものと考えられる。

近世以降の遺物 (51~61) 肥前系と非肥前系の2者がある。また磁器と陶器に区分されため、両者を分けて略述する。

磁器 (51~57) 全て伊万里染付と考えられる。器種は、香炉(51)と碗類に分類され、後者は更に所謂「くらわんか碗」形のもの(52~55)と丸腰形のもの(56~57)がある。54は端反風の形態で、19世紀でも中頃のものと考えられる。

陶器 (58~61) 器種には擂鉢(58~60)と甕(61)がある。擂鉢の3点は、地方窯と考えられるが、生産地は不明である。61は、唐津系の大甕で、口径は33cmを計る。

4 戸口遺跡

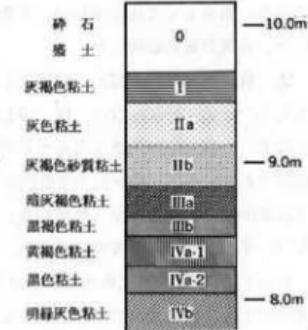
1) 遺跡概観

戸口遺跡は、柏崎市大字吉井字戸口を中心として広がる面積の広い遺跡である。吉井集落の西側に位置し、北へ延びる天神社の尾根筋前方の沖積地に立地する。尾根を形成する更新世の地盤は、戸口遺跡の地下へ没して基盤となっていると考えられる。

遺跡の範囲は明確でないが、明治44年の土地更正図に記載された地割の観察では、微高地状の地形は、市道に沿って西へ延び、また北へも広がっていることから、第II図に示した範囲より更に拡大される可能性を充分に秘めている。試掘確認調査における第3地区は、TP-1～7まで約400m近くにわたって遺物包含層が存在することが示唆的である。これに対し、低湿地状の地形は、西ヶ峯台地の西側、戸口遺跡から権田町遺跡の間、及び礼坊遺跡の南側に広がっていることが、昭和57年の調査で確認されており、南西側や北東側への遺跡範囲はほとんど拡大しないと推定される。

今回調査対象となった調査区は、吉井水上I遺跡の延長部分のB地区（13～23G）と、帝国石油中通ガス採集所西側のC地区である。戸口遺跡A地区は、市道の北側で、昭和57年の立合調査において遺構・遺物が検出されている。

B地区において確認された遺物包含層は、第IVb層と第IVa-2層の2枚で、遺構確認面は、第IVa-1層上面と第IVb層上面である。2枚の包含層が分離するのは、18G以降で、13～17Gでは遺構確認面は第IVb層に集中する。包含層上層は平安時代、下層は古墳時代に相当し、13～17Gでは両時代の遺構と遺物が検出されている。遺構は、13～17Gから検出されたが、遺物の出土量は概して少なく、当地区で主体的な古墳時代の遺物は、22④～23①Gの第IVa-2層から集中して出土している。



第17図 戸口遺跡B-23G土層柱状模式図

C地区は、全体的に湿地性の層序を呈していたが、これは中世～近世以降の用水路等及び、水田化されていたことの影響を多分に受けたと考えられ、比較的多く遺物が出土した平安時代と中世以降では全く異った環境にあったと推定される。当地区は、旧用水路等の溝址によって調査区の大半が占められ、プライマリーな堆積層は大半が擾乱を受けている。遺物包含層は、第III層と第IV層の2層に区分されるが、B地区との層位関係は不明である。第IV層下には、第V層として明緑灰色～緑灰色の粘土層が少なくとも1m以上は堆積していた。本層は砂砾層と互層をなすもので、古墳時代～平安時代と考えられる磨滅した土師器が出土している。

出土した遺物の時期は、古墳時代末～近世以降に及ぶが、主体をなす時期は平安時代と江戸時代であり、比較的まとまって出土し、量も多かった。

2) 遺構

戸口遺跡の調査は、東西に150m程離れたB、Cの2地区を調査した。両地区は、層序や地形及び環境などに明らかな相違が認められる。これらの条件は、時代とともに変遷しただろうが、両地区における主体的時期についても異っていた。本項においては、両地区を分けて概略を述べることとしたい。

a) B地区の遺構

本地区における遺構の分布は、13~18Gの微高地上に集中して検出され、19~23Gの一段低い地点からは検出されなかった。後者の地区において、第IVa-1層上面は、遺構確認を数度か繰り返した結果であり、遺物の出土もほとんど見られず、当初から存在していなかったと考えられる。しかし、第IVb層上面における遺構確認は、悪天候や湧水に悩まされ、充分な遺構確認をなし得なかつたことに起因する可能性が強い。遺構は元来少数であったと思われるが、22④~23①Gの第IVa-2層から多くの土器群が集中的に出土したことは、遺構の存在を示唆したものと考えられる。

B地区から検出された遺構の種別は、土坑2基、ピット32基、溝5基、その他杭列や不整形坑4基の合計43基である。しかし、時期が明確なのは、SK-21の1基のみで、他は特定不能である。幅をもって比定すれば、古墳時代を中心に弥生時代後期終末期から平安時代頃である。以下、各種別毎に説明したい。

土坑 (SK-21, 27) 明確な土坑はSK-21のみで、SK-27からはほとんど遺物が出土していない。SK-21は、B-17①G第IVb層上面から検出された。覆土上層は第IVb層と大差なく、土器片と炭化物を含んでやや暗色を呈していた。このような例は、礼坊遺跡から3基検出されている。平面形はやや梢円形を呈し、規模は1.2×1.04m、深度は0.28mを計る。遺物は比較的多く出土したが、磨滅が著しく図示可能なものは少なかった(第20図62~66)。SK-27は、半掘したのみで規模等は不明、平面形は方形と考えられる。

ピット群 第IVb層上面及び下層の2面で検出された。平面形は大半が円形で、直径は20cm前後から大きくて30cm前後と小さなもので占められる。B-16④~⑤の小ピット群がやや配列気味であるが、その他は調査区幅が狭いこともあって規則性は認められない。

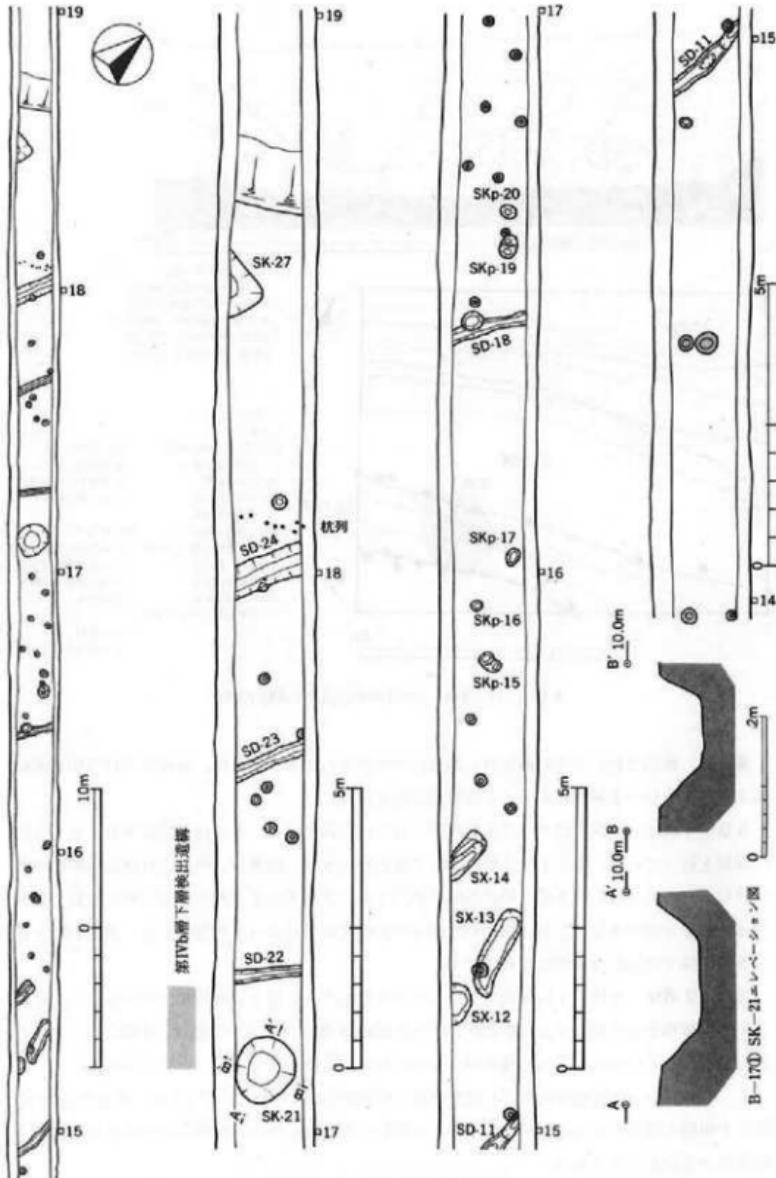
溝 壴 (SD-11, 18, 22~24) 溝幅は20~64cmと小溝で占められる。方向は、SD-11が南北に近いがその他は南西~北東に向う。詳細は不明である。

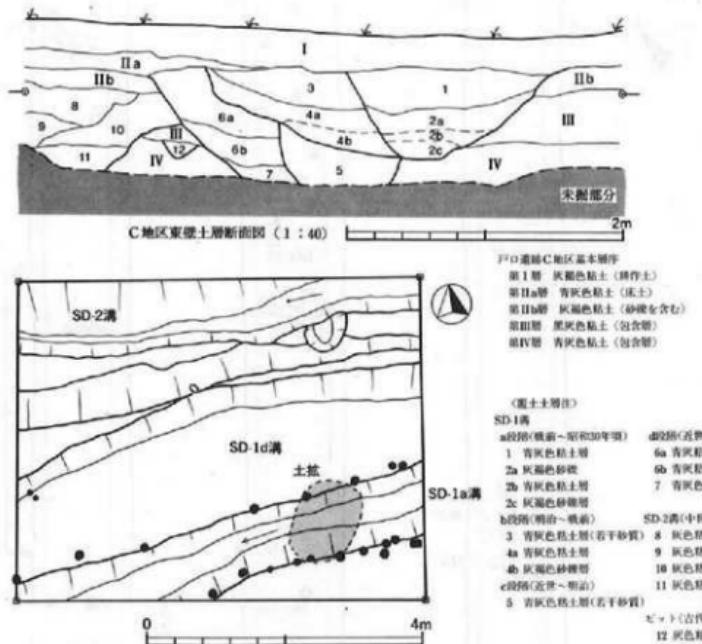
杭 列 B-18①から検出された。杭の直径は5cm程と小さい。これに伴う溝等はない。また時期的にもそれほど遡るものではないであろう。

不整形坑 (SX-12~14) 短かい溝状を呈するもので、SX-12も土坑状だが、他と同じ可能性もある。深度は10cm程で浅い。

b) C地区的遺構

本地区は、6m×5.6mの規模で調査した。遺構は、溝址が主体であるが、この中に旧用水路址が含まれていたため、當時多くの湧水であふれ、遺構確認はかなり困難を伴った。





第194図 戸口遺跡C地区土層断面図及び造構平面図

溝 址 検出された2本の溝址は、調査区の大半を占める。両者は、東壁における切合関係によって、SD-2溝址が古いことが確認されている。

SD-1溝址 旧用水路として永く使用されていた溝である。本址は構築後少なくとも3回の改修を行っている。覆土1~2層によって覆われたSD-1a溝は、両側に直径15cm前後の太い杭によって支えられ、本址の最終段階に相当する。吉井水上I遺跡で検出されたSD-3旧用水路址の分流であることが、明治44年測図の土地更正図によって確認される。遺物の出土量は多く、縄文時代から現代に及んでいる。

SD-2溝址 SD-1の北側に平行して走る溝である。覆土は灰色粘土を主体とし、SD-1とは様相を全く異なる。覆土の上面を第IIb層が覆っている。遺物は、平安時代~中世の遺物が出土していることから、概ね中世を中心とし、近世には下らないと考えられる。

土 坑 SD-1溝址河床面から検出され、平安時代の遺物を多く出土した。湧水のため、平面形や規模を確認できなかった。覆土は、第III層~第IV層に類似した灰色系の粘土層である。性格等の詳細も不明である。

3) 出土遺物

遺物は、土師器や須恵器、陶磁器等の土器類が主体で、他に鉄製品やガラス製品が出土したが、現代のものが大半であり、ほとんどを割愛した。B地区とC地区に分けて記述したい。

a) B地区出土遺物（第20図～第22図）

B地区から出土した遺物は、ほとんどが土器類で占められる。時期的には、弥生時代後期から中世に至るが、主体的なのは古墳時代の土器群である。本項では、遺構出土遺物（SK-21）、一括土器及び包含層出土土器の3項にわけて概略を述べる。

i) SK-21土坑出土遺物（62～66） 遺物は、比較的まとまって出土した。種別としては、土器類と石製品に区分される。覆土内には、遺物とともに炭化物が多く含まれ、鉛錆状の塊も少量検出されているが、坑壁等に焼土等は認められていない。

土器類（62～66） 出土した土器は、比較的まとまって量的に多かったが、軟質で磨滅が著しかった。このため器形や調整等まで窺える資料は少ない。色調は、にぶい橙色～橙色を呈し、胎土には粒径1～2mmの砂粒が比較的多く含まれていた。焼成は不良である。須恵器は出土しなかった。高环や甕の特徴は礼坊遺跡出土土器群とはほぼ同じである。

甕（63、66） 口縁部が外反しながらやや長いF₁類（63）と頸部が筒形を呈し口唇部付近でやや屈曲して外反するE₁類（66）がある。63は、口径12cmを計るが、頸部以下は不明である。66は、口径16cmを計る薄手の土器である。両者とも調整痕を観察できない。

鉢（65） 口縁部はやや受口状に内凹しながら外傾する。口径28cmと大型である。薄手。

高環（62） 高環底部が楕円形である。環部は輪形に近いもの（A₂類）と考えられる。環底部から口縁への立上部には、明瞭な後線が認められる。

底盤（64） 底径6.4cmを計る薄手のつくりで、甕あるいは鉢の底部と考えられる。

石製品（図版7-1） 石鍤が1点出土している。形態は、上半位に組かけ用のくびれ部を作出し、下半側面は凹凸状に打欠かれている。高さ7.4cm、最大径6.6cm、くびれ部径4.8cmを計る。安山岩製。

ii) B-22④～23①G 第IVa-2層出土一括土器群（69～75、77～78、80～81、83、86～90、92～94、98～106） 本土器群は、22⑤～23①Gに集中的に出土し、近隣するため含めた22④G出土土器（80、88、93）は少ない。また、23②Gからは、遺物はほとんど出土せず、図示した中にも含まれていない。土器群は湿地における粘土層に閉じられていたためか、土器の状態はあまり良くなく、全体に磨滅して破口が丸くなり、器内外面の調整痕が不明となったものも少なくない。これら土器群の図化においては、口縁部を主体とした破片からの復元実測が多くなっている。器種では、甕が大半を占め、次いで高環が多く、壺や環の出土量は少ない。

甕（69～75、77～78、80～81、83） 甕類は、本土器群で50%以上を占める主体的器種であるが、器形全体を窺える個体が少なく、図化には口縁部を中心に行なった。

胎土は、全てに粒径が2mm近い砂粒を多量に含むが、特徴的な点は、粒径が3mmや5mmに及ぶ砂粒を多く含む土器が少くないことである。色調は、黄橙色を主体に橙色～褐色を呈する

が、底部内面が黒褐色を呈するものが若干認められる。調整は、体部内外面にハケ調整を施すが、内面肩部以下にヘラ削状の調整を施す例も少なくない。但し、調整痕は磨滅のため不明なものがあり、ある程度観察可能な個体でも頸部～肩部や胴下半の外面は、二次焼成による影響か特に残存率が悪い。焼成は、概して良いのかも知れないが、埋藏状態の影響か全体に粉っぽく、軟質である。口縁部から底部に至る器厚は、8mm前後の土器が大半で、薄手の個体はほとんど見受けられない。

形態としては、口縁部のくの字状がややだれ、緩やかなものが多いが、細部において幾つかに細分が可能である。本項では、この口縁部形態を中心に分類し、記述してゆきたい。体部は、球胴に近いもの(77)と、やや長胴化傾向が窺えるもの(78、81)があるほか、肩部のほとんど張らないものが認められる。この他では、個体の大きさで大小が認められるが、大形ではなく、中形とも言うべきで、特に大きい個体は出土していない。

壺A類 小片のため図示しなかったが、口唇部側面を幅3～5cm程度取りをするくの字口縁甕であり、極く少量出土した。口縁部はやや長く、外反が強い。調整は、口縁部に横ナデを施すが、前段階のハケ調整痕を明瞭にとどめている。

壺B類 (77) 個体数は少ない。口縁部のくの字が比較的明瞭で、体部が球形に近い個体である。口唇部は概ね丸状を呈するが、図示した断面のように上端が平坦な部分がある。調整は、外面が右斜位のハケ、内面がヘラ削状に砂粒の移動が認められるが、頸部下方は磨滅している。

壺C類 (69～71、78、80～81、83) 口縁部の屈曲が緩やかで、胴部の形態がやや長胴化したものである。大きさから2類に細分される。口唇部は、丸くやや脹らむもの(70)や若干尖り気味のもの(78)があるが、概ね丸状を呈する。

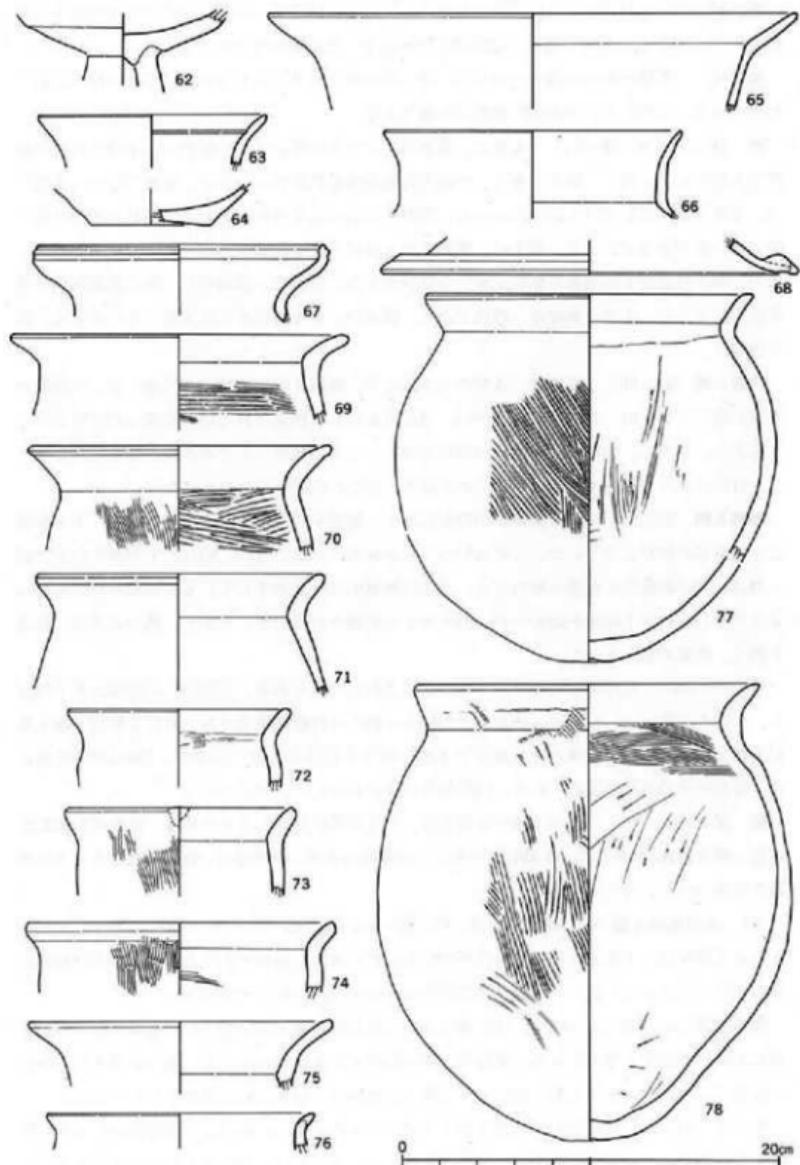
壺C I類 (69～71) 肩部は脹らます直線的な形態をとる小形品である。口縁部の形態は、69の外傾がやや強く、70は外反気味となっている。調整は、口縁部を横ナデし、体部内外面はハケ調整されるようである。

壺C II類 (78、80～81、83) 肩部がやや脹む大形品で、壺C I類のように肩部が直線的なもの(83)も含まれる。口縁部形態の細部では同一の個体がなく、各々が若干異っている。調整は、やや縱位に近いハケが外面に施されるが、内面は、頸部に横位のハケ調整、以下はヘラ削状の調整を施している。83は、胴部上半に横位に近いハケ調整が施され、また口唇部はC I類の70に近似する。本類は壺類でも、量的に多い主体的器種である。

壺D類 (72～74) 口縁部は、やや短かく外傾し、胴部は、ほとんど張らず、最大径が口縁部にある器種を一括した。形態的には鉢形に近い。大きさによって2類に細分され、小形品をI類、やや大形のものをII類とした。数量的には、あまり多くない。

壺D I類 (72～73) 調整は、磨滅が著しくて明瞭でないが、口縁部の横ナデは、口唇部から内面屈曲部に施され、口縁部外面の大半にハケ調整が及んでいる。

壺D II類 (74) 1個体のみ確認されたが、やや小片であった。口径は、若干小さくなり、I類に近い可能性もある。調整の特徴は、I類とはほぼ同じである。



第208图 戸口遺跡B地区出土遺物(1) 62~66(SK-21), 67~78(包含層)

壺F類 (75) 口縁部が比較的長く外反するものを一括する。75は、途中で若干屈曲する形態(F₂類)である。磨減が著しく調整は不明である。出土量は極めて少ない。

壺 (86) 壺類の出土は極めて少なく、壺(直口壺)と考えられる脚部片が1点検出されたのみである。このため、壺形態の様相は不明である。

高 坯 (87~90、92~94) 高坯は、甕類に次いで多く確認された器種で、全体の約30%程度を占めている。但し、破片が多く、坯部と脚部全体の器形については、明確でない。本項では、坯部と脚部とに分けて記述したいが、器形上両者はあまり細分されず、高坯の器形は齊一的、統一的であると言える。胎土は、甕類よりも砂粒の含まれる度合が少なく、精選されているが、90には粒径5mm前後の砂粒が極く少量含まれる。色調は、器内や一部の脚部内面が黒灰色を呈するが、大半は黄橙色~橙色である。焼成は、あまり良好と言えないものが多く、粉っぽい。

坯部A類 (87~90) 坯部は、A類のみであるが、椭形に近い2類(88~90)と、口縁部の外傾が強い1類(87)がある。87~89は、黄橙色を呈し、精選された素地を使った丁寧なつくりである。しかし、90は胎土に大粒の砂粒を含み、ハケ調整痕をとどめるなど粗雑な感じを与える、質的にかなり相違がある。前者でも朱彩されたものは認められなかった。

脚部A類 (92~94) 脚部上半が円筒形に近く、裾部が大きく広がる形態である。本土器群では、裾部の資料に乏しいが、このA類のみしか検出されていない。92は、やや張らむが、93~94は、ほぼ直線的に裾部へ移行する。内面の輪積痕は一切消失している。朱彩されたものは少ないが、92に若干痕跡が認められ、胎土もよく精選されている。しかし、他の2点は、焼成も悪く、磨減が著しかった。

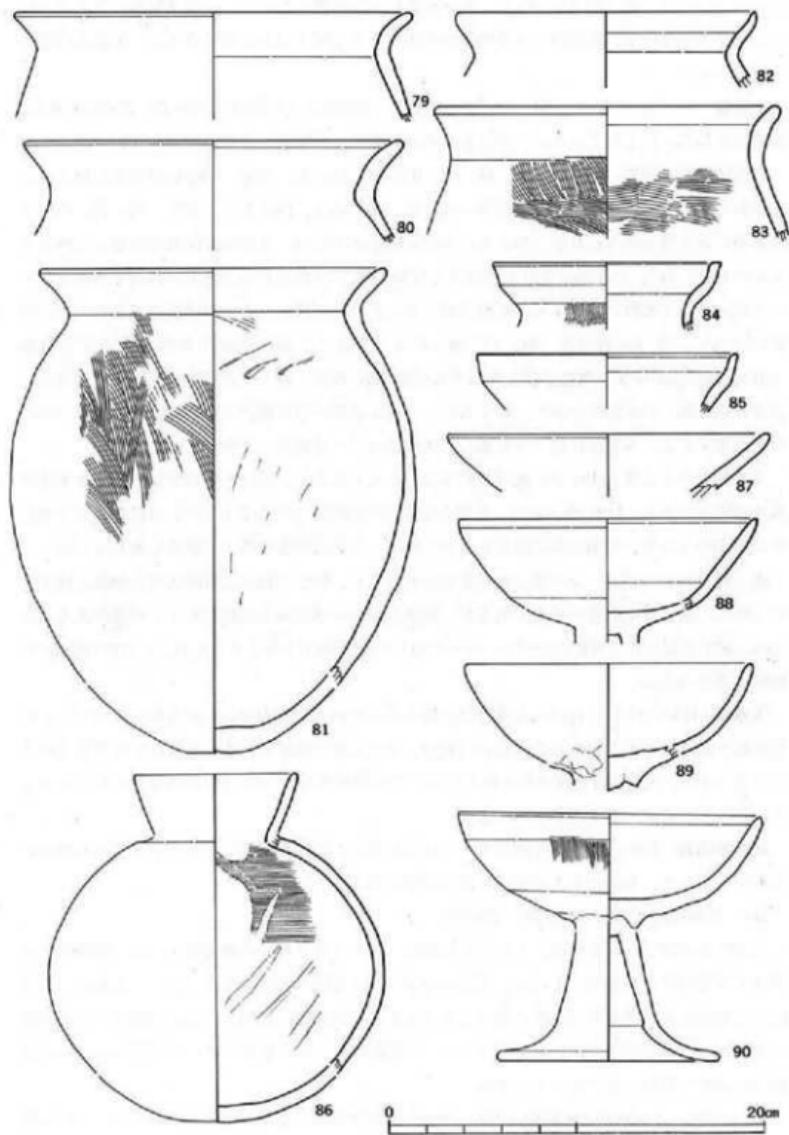
坯 (98~101) 坯形態の土器は、4点が確認されたのみである。形態は、口縁部が若干外反し、底部も丸底に近い形態で、椭形に近似する。胎土は比較的精選され、砂粒も粒径1mm未満が主体である。口縁部は横ナデが施されるが、他はそれほど丁寧ではない。100の体部外面には、輪積痕状の痕跡が認められる。内黒例等は存在しないようである。

底 部 (102~105) 本項で述べる底部は、大半が甕に伴うと考えられる。壺底部の可能性が強い個体は106であるが、時期的にやや古い可能性がある。甕底部は、78にみられるように概ね丸底風を呈し、若干凹むものが多い。

iii) その他の土器 (67~68、76、79、82、84~85、91、95~97、107~124) B地区から出土した土器類は、上述したほかに弥生時代から近世に至る土器類が出土した。本項では種別に従って述べることとしたい。なお、底部破片については、一括して述べる。

弥生土器 (67~68、84~85) 出土量は少なく断片的である。時期的には後期後半から終末期にかけての所産と考えられる。器種は、壺と高坯もしくは器台である。胎土に含まれる砂粒は少なく、全体的にかなり粉っぽいものである。色調は、白色から淡黄色を呈していた。

壺 (67、84) は、口縁部が受口状を呈するものを主体とする。67は、口唇部側面に2条の凹線文が巡らされ、口縁部は緩やかにS字状をなしている。84は、口唇部上面端部が、外方へひ



第21図 戸口遺跡B地区出土遺物(2) 79~90 (包含層)

きだされている。68は脚部片のため、高坏か器台かは判然としない。裾端部側面に粘土帶を付し、肥厚させている。磨滅のため調整等は不明である。胎土はかなり精選され、色調は白色を呈している。

土師器 (76、79、82、85、91、95~97、119) 古墳時代と平安時代の両者が認められるが、後者は少量しか出土していない。また前者の諸特徴は、前述した一括土器群と同じである。

古墳時代の土師器 (76、79、82、85、91、95~97) は、B-22④~23①G以外から出土した土器群である。量的には少ない。器種には、甕、壺、高坏、椀がある。甕類 (76、79、82) は、当該期に最も普遍的なC II類 (79) と、頸部が筒形状を呈し、口縁部が屈曲して短かく外反するものE類 (76)、口縁部が受口状を呈するG類 (82) に分類される。胎土、色調や焼成等については、一括土器群に共通する。壺類 (85) は、受口状を呈した1点が確認されたのみで、非常に少ない。高坏は脚部片 (91、95~96) の3点がある。接合部から外傾を強くするB類 (91)、接合部が中実で裾部が強く外傾するC類 (95) 及び、脚上半が円筒状を呈すると考えられるA類 (96) の裾部片がある。前2者は、一括土器群からは確認されていない。椀形 (97) は1点出土した。口唇部に横ナデを施し、体部にはハケ目痕をとどめている。

平安時代の土師器 (119) は、絶対量が少ないこともあるが、かなり軟弱で脆く、図示可能な個体は限定される。119の無台坏は、底部から徐々に内傾しながら立上がり、口縁部が若干外反する薄手のもので、底面に糸切痕をとどめている。口縁部外面に横ナデ調整を施している。

底 部 (107~113) 全て甕と壺の底部と考えられ、弥生土器と古墳時代の土師器に伴うものである。後者の壺形態が不明であるが、底径が4.0cm~6.2cmと比較的大きく明瞭であることから、弥生土器に伴う可能性が強い。とくに111~113は弥生土器と考えられる。112の底面には糊痕が認められる。

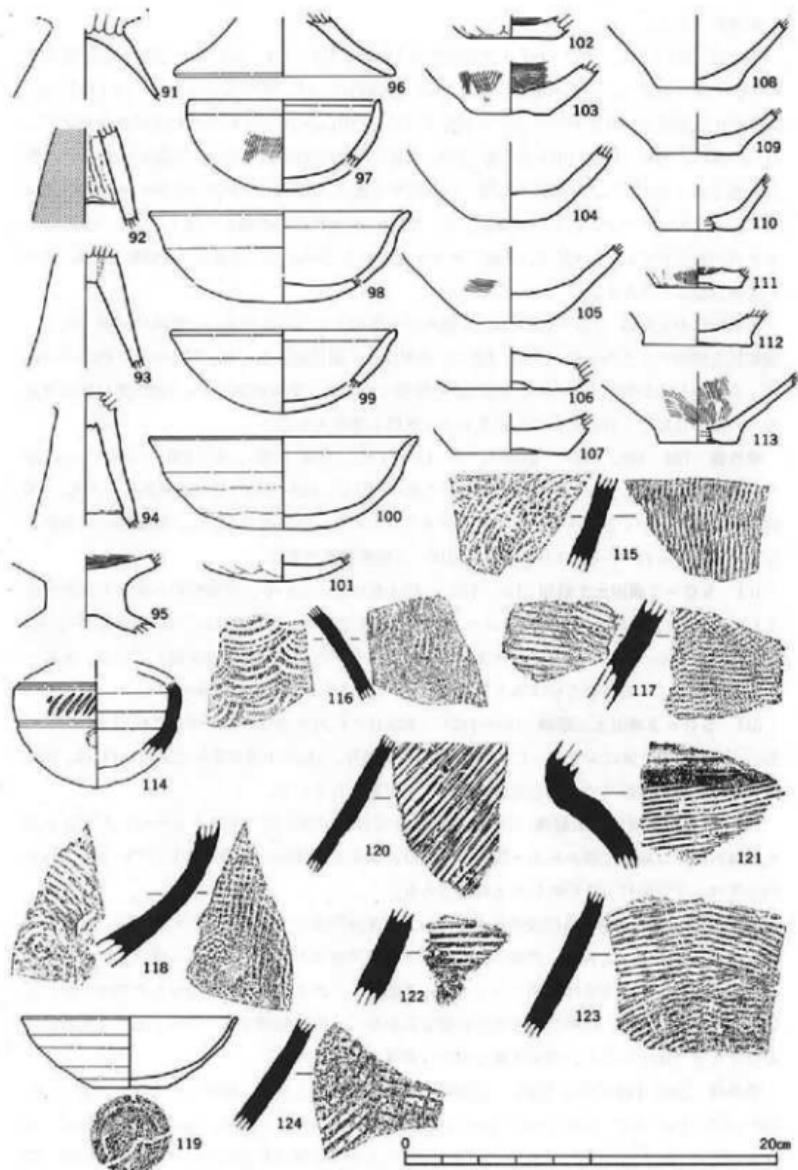
須恵器 (114~118) 114は、古墳時代の扉と考えられる。断面全体が灰色を呈しており、6世紀後半以降の所産と思われる。115~118は、全て大甕の破片である。外面は全て平行文のタタキ目であり、内面は青海波文を主体としたアテが使用されている。117は内面も平行文となっている。平安時代の所産と考えられる。

珠洲系陶器 (120~124) 外面にタタキ目文を有し、内面が指頭によっておさえられ無文のものを一括した。外面のタタキ目は平行文が主体である。

b) C地区出土遺物 (第23図~第26図)

C地区から出土した遺物は、大半が土器類で、他にガラス製品や鉄製品がある。時期的には、奈良・平安時代から現代に至るが、主体をなすのは平安時代と江戸時代である。遺物は、本地區から検出された溝遺構や土坑と考えられる集中出土地点等から出土したものが多い。溝内出土土器類は、溝が旧用水路であったことから時期的にもかなり混在していた。本項では一応遺構別に遺物の概略を述べることにする。

i) SK-1土坑出土土器類 (125~139) 土器の時期では、古墳時代後期末から奈良時代前期にかけての土器 (137~138) が少量混入しているが、主体をなすものは平安時代の土師器



第22図 戸口遺跡B地区出土遺物(3) 91~124 (包含層)

と須恵器である。

土師器（131～134、136～139） 平安時代の土師器（131～134、134）は、比較的出土量が多いが、大半は甕片で、図示可能なものは少ない。器種は、壺、甕で占められる。壺（131）は、底面系切無調整で、他をロクロナデで調整するが、内面は平滑にされロクロ成形痕を残していない。甕は、小形（132～133）と大形（134、136）が認められる。132は、胸部が短かく、調整は全面をロクロナデし、外面下半に薄くヘラ削りを施す。133は、口唇部が内傾し端部をつまみ上げ、全面をロクロナデによって調整する。134は、口唇端部の両側をつまみ出し、口縁部にカキ目が施されている。136は、外面にタタキ目痕をとどめるが、内面はハケ調整を施し、アテの痕跡は認められない。

古墳時代の土師器（137～139）は、小破片が少量出土したのみである。磨滅は極端でなく、調整痕を明瞭にとどめる例が多い。137は、内面にハケ調整痕をとどめ、高環部か椀あるいは鉢と考えられるが判然としない。138は壺口縁部であるが、磨滅は著しい。139は甕口縁部である。口縁部は短かく外反したのみの非ロクロ成形土師器である。

須恵器（125～130、135） 器種は、壺（126～130）、壺蓋（125）、甕（135）が出土した。壺は、有台壺が非常に少なく、主体は無台壺である。但し、129～130は有台の可能性がある。126は、腰部が丸くつくられロクロ成形痕をあまりとどめない。白灰色を呈し、時期的には古相を呈すると考えられる。128は完存品、底面はヘラ切無調整である。

ii) SD-2溝出土土器類（140～142） 出土量は多くないが、平安時代～中世の遺物が出土している。140は無台壺で、底面はヘラ切り無調整である。142の甕は、口縁の外傾が強い長胴形態を呈する。ロクロ成形後、外面下半をヘラ削り、内面にハケ調整を施している。SK-1出土土器群よりも古相を呈すると考えられる。141は珠洲系陶器の掘鉢である。

iii) SD-3溝出土土器類（143～145） 本址は、C地区西壁際でわずかに検出された溝である。遺物の出土量は少なかった。143は製塙土器破片、145は土師器甕片である。144は、肥前系と考えられる青磁片で、内面見込みに波状文が施されている。

iv) SD-1溝出土土器類（146～187） 本址は、旧用水路であることから、廃棄されたり、流れ込んだ縄文土器から近・現代の陶磁器におよぶ各種の土器類が出土している。これらの主体は、平安時代と江戸時代の土器類である。

縄文土器（147） 縄文時代後晩期と考えられる深鉢割部片である。上方に綾縞文、下半には単節斜縞文（L R）を施す。磨滅が著しく、天神社遺跡等からの流れ込みと考えられる。

土師器（148） 古墳時代後期と考えられる甕頸部片である。緑灰褐色系を呈した焼成の良好な破片である。胎土は、粒径2mm未満の砂粒を含むが、比較的精選されている。他に平安時代のものなど多く出土したが、図示可能なものは非常に少なかった。

須恵器（146、149～157、159） 須恵器も比較的多く出土した。器種としては、大甕（146、149～150、156～157、159）と壺（151～153）、壺（154～155）がある。壺は無台壺のみで、有台壺は認められなかった。底面はヘラ切りのみである。壺類は有台が主体である。高台は、端

部が内側へつまみ出されたような形態の154と、内削ぎ状を呈する155がある。これら須恵器の時期は、9世紀を中心とした平安時代の所産と考えられる。

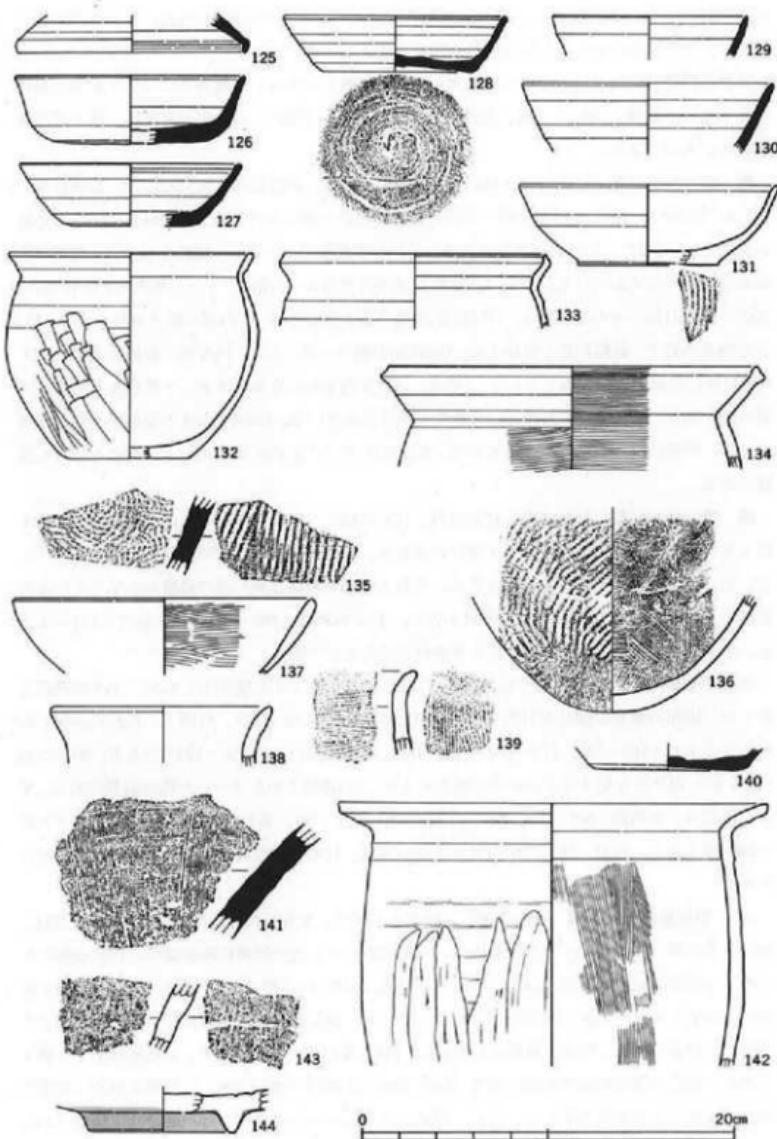
珠洲系陶器（158、160） 中世に属する土器類は概して少なく、珠洲系についても出土量は多くない。擂鉢（158）と大甕（160）が出土している。160は、口唇部が肥厚し、横ナデが施されないものである。

陶器（169、172、176～177、183～187） 出土量は、磁器に比して少ないが、器種は多い。169は、器種不明である。底面を除いた内外面に白灰色の釉がかけられ、底部付近に注口の痕跡が認められる。172は灯火具の受け皿である。全面に鉄釉がかけられ、褐色を呈する。底部は回転糸切り痕が残されている。176～177は肥前系の皿である。176はオリーブ黒色釉がかけられ、見込に蛇ノ目釉ハギがなされる。177は、灰色釉が施されたもので、内面に胎土目痕がある。184は京焼風の鉢で、鉄釉が若干残存する。185は越中瀬戸と考えられ、内外面に鉄釉を施すとともに、底面に回転糸切痕を残している。183は、口縁部内面から外面にオリーブ黒色をしたガラス質の釉が施され、頸部以下の内面には鉄釉がかけられている。186は、全体の器形が不明な器種である。外面に緑色の釉を施したもので、文様はスタンプ文である。187は、赤褐色を呈した擂鉢である。

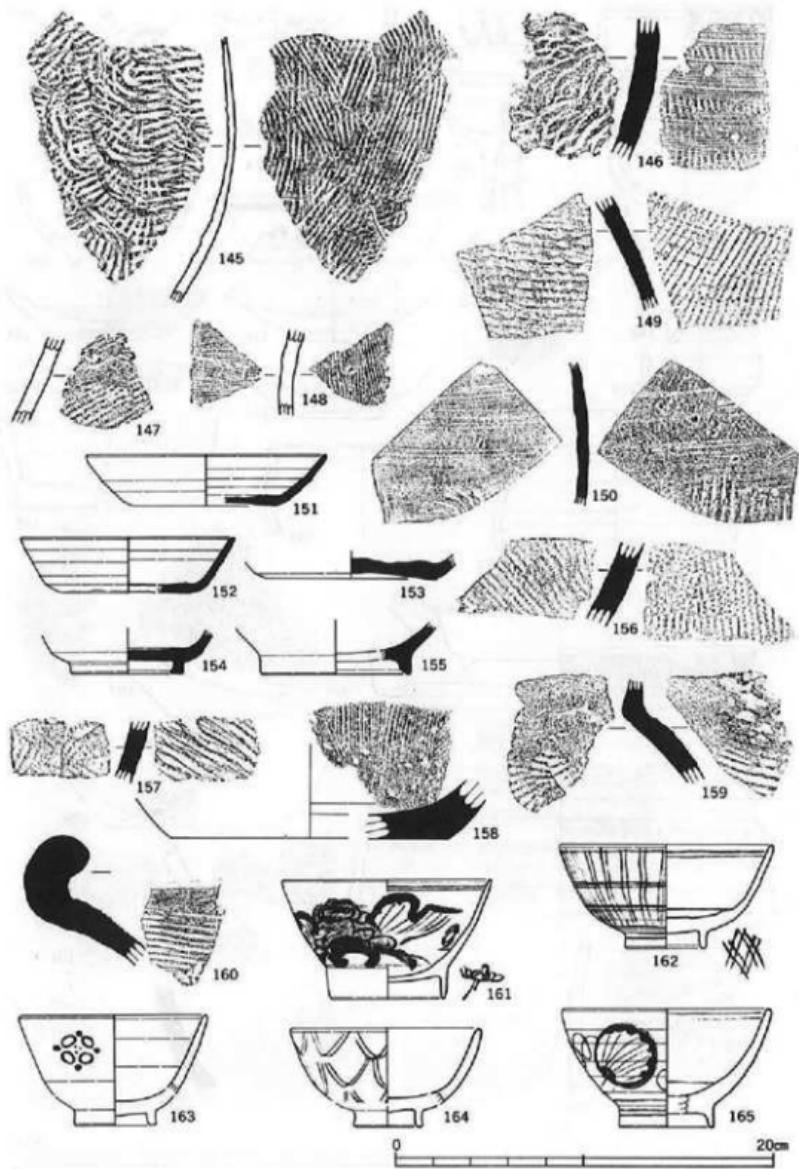
磁器（161～168、170～171、173～175、178～182） 本址では最も主体をなすもので出土量も多い。時期的には近世から近・現代に至るが、図示した磁器は江戸時代のものを中心としている。产地は、肥前系を主体とするが、それと区別が困難な瀬戸系の磁器が含まれている可能性がある。種別としては大半を染付が占め、若干の青磁（182～182）や上絵付（171）がある。近・現代の磁器は、プリントによる染付がほとんどである。

染付の器種は、徳利（170）や仏飯器（171）及び皿（175）が少量出土したが、大半は碗類であった。碗類の形態は細分が可能で、広東碗と称されるもの（161）、所謂「くられんか碗」形を呈するもの（162～165、173～174、178～180）、丸腰形のもの（166～168）がある。断面の色調は、白～白灰色を呈するものが大半を占めるが、163は胎土ががさついた陶胎磁器である。染付の色調は、青灰色（162～163、167～168、170、175、178）、青色（164～166）、オリーブ灰色（180）等がある。なお、162、165の見込と高台端部、168、178の高台端部に砂土目痕が認められる。

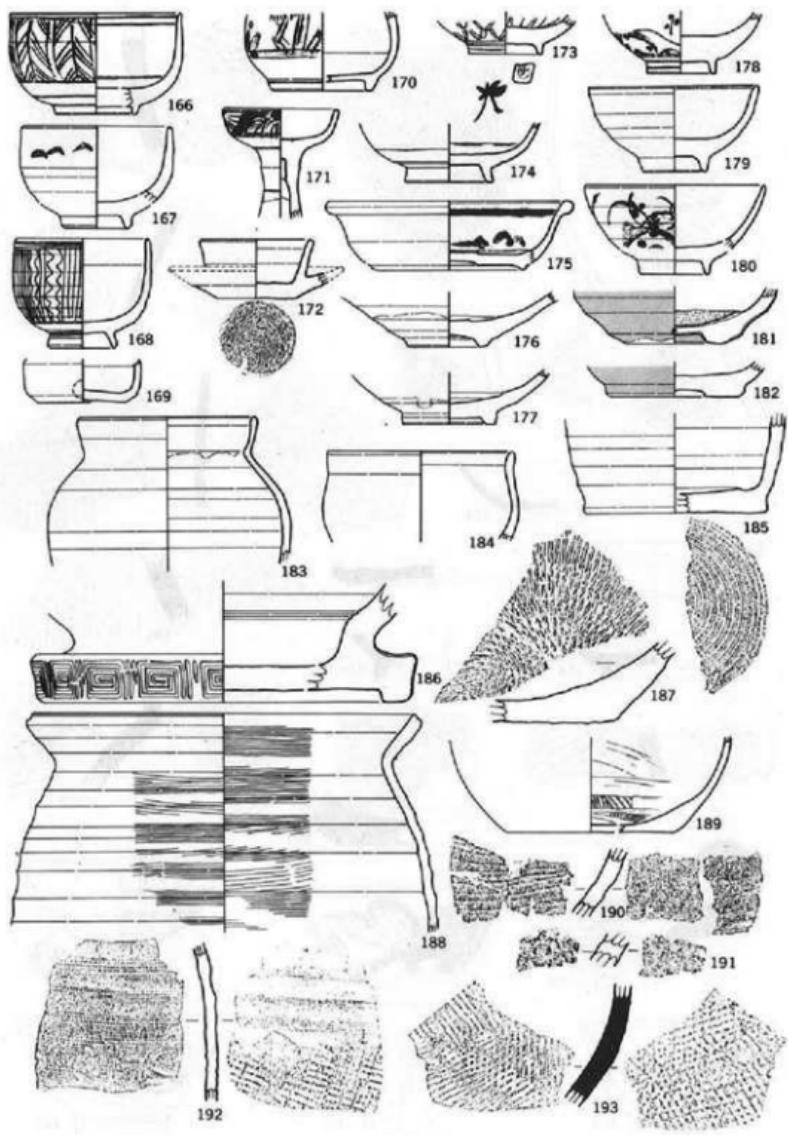
v) 包含層出土土器類（188～206） 種別としては、平安時代の土師器（188～189、192、196）、須恵器（193～195）及び製塙土器（190～191）と、近世以降の陶磁器類（197～206）がある。土師器では、大形甕（188、192）と小形甕（189）に分類される。188は、ロクロ整形窓の凹凸が著しく、ハケ目はその凸部に施されている。製塙土器は、焼成良好、厚手で内面をナデやハケ調整を施し、外面に輪積痕をとどめ、143と類似した破片である。須恵器は全て大甕片である。近世以降の陶磁器類は、磁器（197～202）と陶器（203～206）に分類される。磁器は、器形や文様から時期的に新しく、近代～現代に及ぶものが含まれている。陶器は、擂鉢（203、205～206）を主体とし、越中瀬戸系の壺（204）が出土した。



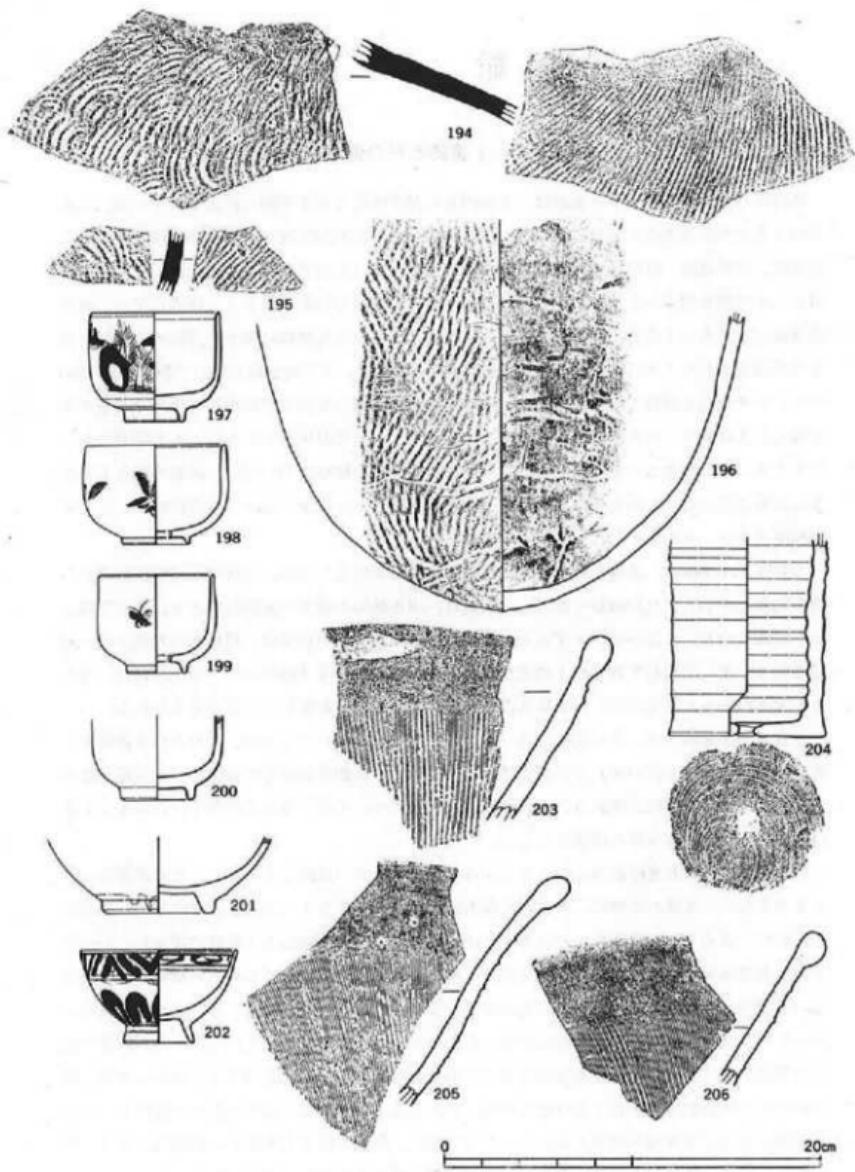
第23図 戸口遺跡C地区出土遺物(1) 125~139(SK-1), 140~142(SD-2), 143~144(SD-3)



第24図 戸口道路C地区出土遺物(2) 145(SD-3), 146~165(SD-1)



第25図 戸口遺跡C地区出土遺物(3) 166~187(SD-1), 188~193(包含層)



第26図 戸口遺跡C地区出土遺物(4) 194~206 (包含層)

IV 総括

1 吉井遺跡群における吉井水上I遺跡と戸口遺跡の位置付け

柏崎市吉井地内に分布する遺跡は、2km四方に20ヶ所近くが集中的に確認されている。これらのうち大規模な調査が実施された下谷地遺跡のほか、昭和56年度から昭和59年度にかけ、礼坊遺跡、萱場遺跡、野附遺跡、権田町遺跡、吉井水上II（旧吉井小学校裏）遺跡、行塚遺跡に対して小規模な調査が実施されている。そして今回、帝国石油新長岡ライン建設に伴い、西草薙遺跡、吉井水上I遺跡、戸口遺跡が新たに調査され、吉井遺跡群に属する遺跡のうち10ヶ所までが調査されたことになった。また、発掘調査の規模は、下谷地遺跡を除いて幅1.6m～2mのトレンチ発掘と同義であったことは、遺跡の構造や遺構の規模及び形態等不明確な部分を多く残したとは言え、ある程度の内容を知ることができ、文化財保護上においても有意義であったとすることができるだろう。さて、吉井遺跡群各遺跡の概略については、紙数の都合もあり、また以前に述べたことがあるため（品田 1985）、今回新たに対象となった3遺跡について、その概略を述べ、まとめとしたい。

吉井水上I遺跡は、遺物では平安時代以降の土器類が出土したが、主体は江戸時代後期から明治前後を中心とした陶磁器であった。遺構は、用水路等の溝及び道路址であり、居住空間という様相ではなく、言わば村はずれという状況にあった。この状況は、現集落の景観とほぼ同じであり、また明治44年測図の土地更正図とも矛盾しない。本遺跡の江戸～明治時代は、現在の状況とほとんど変化がなく、現集落内が即当該期の遺跡と重複していると考えられる。

吉井水上I遺跡では、この他に古代～中世の土器類が出土しているが、これらは本跡南東に拡がる西草薙遺跡と深い関わりが想定される。しかし、試掘確認調査において、西草薙遺跡から古代～中世の土器類が確認されてはいるが、実態については不明な点が多く、吉井水上I遺跡の古代～中世同様今後の課題としたい。

戸口遺跡は、吉井遺跡群内においてもかなり規模の大きい遺跡と考えられ、その重要性は言うまでもない。本跡の時期は、弥生時代後期に始まるが、注目すべきは、古墳時代中～後期と平安時代であろう。古墳時代における主体的土器群は、礼坊遺跡出土土器群に後続し、かつ吉井水上II遺跡出土の当該期土器群と近似するもので、当該時期における集落の構造や意義及びその変遷等、当地域における歴史の重要な部分を担うものとして期待できる。また平安時代においては、試掘坑TP-1やC地区から、かなり大量の遺物が出土している。今回の調査では、その範囲が狭く、かつ湧水の処理が不充分であったため、遺構の確認は十分でなかったが、ある程度の中核的集落が存在する可能性が強いと言える。なお今回、弥生土器が少量出土したが、本遺跡群における後期の初例となった。このことは、弥生時代中期後半から連続的に進なって古墳時代へ引き継がれる可能性を意味し、今後更に期待され得るべき成果であった。

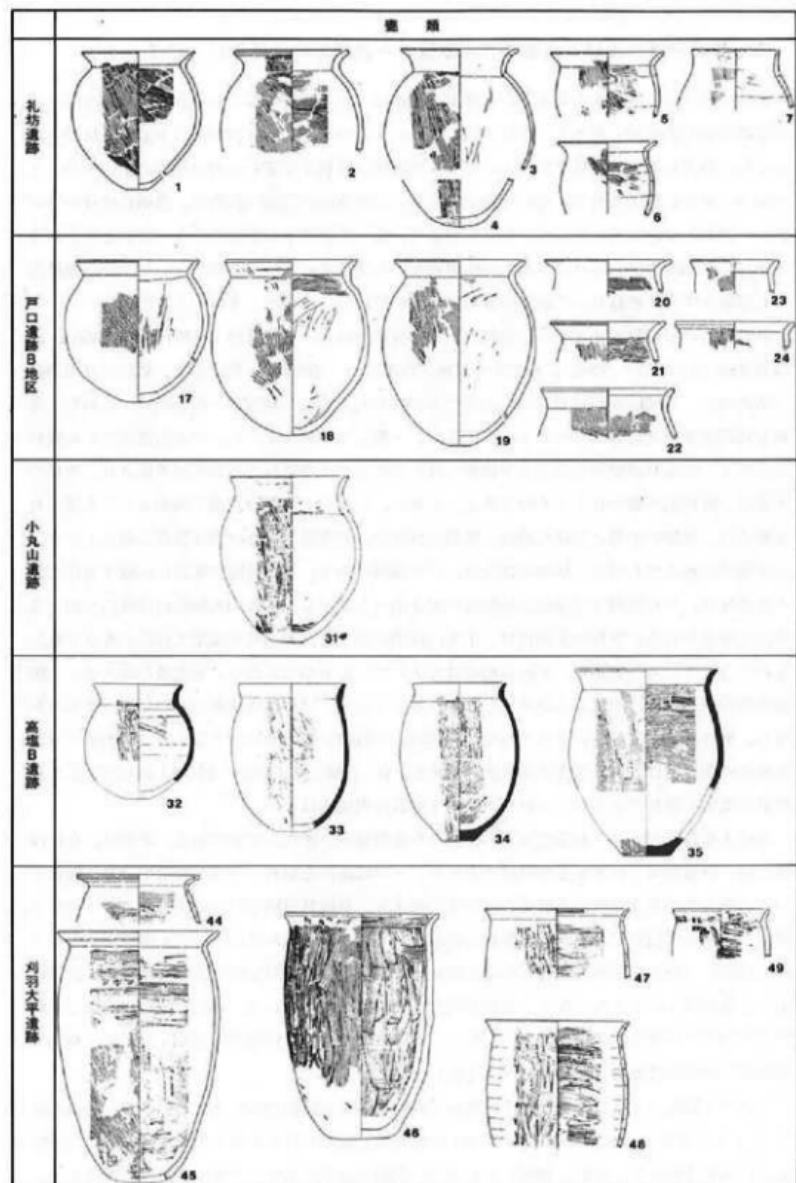
2 柏崎平野における古墳時代中期後半～後期末の土器群について

県内における古墳時代中期あるいは後期の遺跡は、近年比較的多く知られるようになったが、土器群の編年的研究となると、田伏I式、同II式土器の設定（関 1972）以来あまり活発とは言えない状況にある。柏崎平野においても、当該期の資料が充実したのは最近に至ってのことであり、充分に吟味されていない問題と言える。戸口遺跡の当該土器群は、遺構には伴わないが、一時期の所産と考えられる一括資料であり、編年的研究上の意義は小さくないと思われる。本項では、柏崎平野における古墳時代中期後半から後期末に至る土器群について、戸口遺跡出土土器群を中心に概観し、当該土器群の編年的位置について述べ、まとめたい。

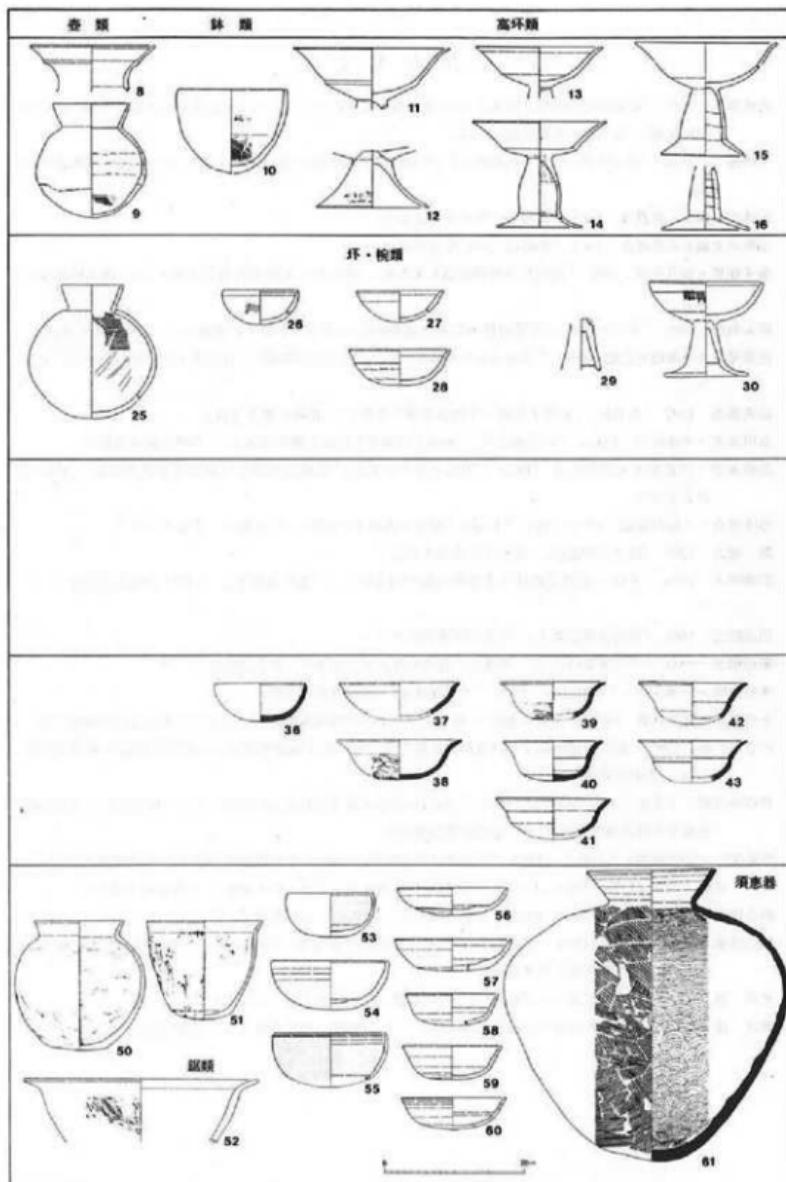
該期における比較的まとまった資料は、戸口遺跡のほか、礼坊遺跡（品田ほか 1985a）、高塩B遺跡（金子ほか 1983）、刈羽大平遺跡（品田ほか 1985b）が掲げられ、更に小丸山遺跡（品田ほか 1985b）からは単独出土の完形品が知られている。第27図～第28図は、これら土器群を時間的変遷を前提に並べたものであるが、一瞥して明確なように、小丸山段階とした資料が少なく、高塩B段階から刈羽大平段階へは少なくとも1段階以上の介在が考慮され、器種の欠落等、資料的不備が目立つものである。しかし、これら土器群の変遷上画期として考慮される観点は、壺類の出現と高环の消滅、甕類の長胴化、須恵器及びその製作技術の導入という4点が掲げられるであろう。壺類の出現は、戸口段階にあり、礼坊段階で甕類に匹敵する量を誇った高环は、戸口段階では壺類と同程度の出土量へと減少し、小丸山段階頃には終焉を迎えるものと考えられる。甕類の長胴化は、小丸山段階に始まり、刈羽大平段階では既に確立されたものとなっていることから、それ以前には完成していたものであろう。須恵器の導入は、土師器壺類が須恵器環の模倣から始まったとされることから、戸口段階以前にその初源が求められるが、製作技術が土師器に導入されたのは刈羽大平段階の前段階以前と言える。本地域における最古の須恵器は、（旧）吉井小学校裏（吉井水土II）遺跡（品田ほか 1985a）から出土した6世紀中葉頃の資料であるが、これらに伴う土師器は明確ではない。

当該土器群において、形態の変化が把握される器種は、甕類と壺類である。甕類は、礼坊段階では、口縁部のくの字がやや明瞭であるが、戸口段階から崩れ、小丸山段階では既に廃れている。そして小丸山段階から底部の安定化が始まり、高塩B段階ではほぼ完了するようである。但し、刈羽大平段階では、底部の稜線は明瞭でなく、また北陸地方においても同様であることから（岸本 1982）、底部の稜線が明確な個体は、系統が異なる可能性が強い。刈羽大平段階に至ると底形はかなり大きくなり、長胴で円筒的な器形となっている。壺類は、戸口段階では口縁部がわずかに外反したのみであったのが、高塩B段階では更に顕著となる。しかし、刈羽大平段階では再び稜線の不明瞭な壺へと変化している。

これら土器群の年代は、刈羽大平段階が7世紀末から8世紀初頭と考えられるが、他は明確でない。とくに礼坊段階の年代は、大角地7住出土須恵器から与えられた年代（寺村ほか 1979）と、石川県漆町編年（田嶋 1986）における年代観では差があり、今後の検討が必要である。



第27図 柏崎平野における古墳時代中期後半～後期末の土器群(1)



第28図 柏崎平野における古墳時代中期後半～後期末の土器群(2)

引用参考文献

- 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布—発掘資料を中心として—」『北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1986 「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」(肥前地区古窯跡調査報告書第3集) 佐賀県立九州陶磁文化館
- 柏崎市史編さん委員会 1982 「柏崎市史資料集考古編2」
- 柏崎市史編さん委員会 1983 「柏崎市史資料集地質編」
- 金子拓男・坂井秀弥 1983 「高塙B遺跡発掘調査報告書」(西山町文化財調査報告書第1集) 西山町教育委員会
- 岸本雅敏 1982 「東江上遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編—」 上市町教育委員会
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1984 「北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁—古唐津・伊万里の流通をさぐる—」
- 品田高志 1987 「西岩野」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第7) 柏崎市教育委員会
- 品田高志・伊藤恒彦 1985a 「吉井遺跡群」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第4) 柏崎市教育委員会
- 品田高志・伊藤恒彦・藤巻正信 1985b 「刈羽大平・小丸山」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5) 柏崎市教育委員会
- 杉原莊介・大塚初重陽 1972・1973 「土師式土器集成本編2(中期)、3(後期)」 東京堂出版
- 間 雅之 1972 「田伏王作遺跡」 糸魚川市教育委員会
- 田嶋明人 1986 「考察—漆町遺跡出土土器群の編年的考察—」「漆町遺跡I」 石川県立埋蔵文化財センター
- 田邊昭三 1966 「陶邑古窯址群I」 平安学園考古学クラブ
- 田邊昭三 1984 「古代窯業の成立」『講座日本技術の社会史』第4巻 日本評論社
- 寺村光晴・安藤文一・千家和比古 1979 「大角地遺跡」 青森町教育委員会
- 十日町市教育委員会 1976 「馬場上遺跡—第3次・第4次発掘調査概報—」(十日町市文化財調査報告10)
- 戸根与八郎 1986 「関川改修埋蔵文化財発掘調査報告書(高田城下鍋屋町遺跡)」(新潟県埋蔵文化財調査書第41) 新潟県教育委員会
- 戸根与八郎・千葉英一・家田順一郎 1978 「国道116号線埋蔵文化財調査報告書(五分一鶴場遺跡)」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第14) 新潟県教育委員会
- 中島栄一・羽形敏朗・八百枝茂 1973 「千刈遺跡調査略報」(加茂市文化財調査報告1) 加茂市教育委員会
- 中村 浩編 1976~1978 「南邑I~III」(大阪府文化財調査報告第28・29・30輯) 大阪府教育委員会
- 前山精明・山口栄一・小林義広 1985 「城願寺跡・坊ヶ入墳墓」 卷町教育委員会
- 横山勝栄・坂井秀弥ほか 1983 「国道116号線埋蔵文化財調査報告書(内越遺跡)」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第33) 新潟県教育委員会
- 米沢 康 1976 「古代北陸道の伝馬制について」『信濃』第28号第5号 信濃史学会
- 米沢 康 1980 「大宝2年の越中国四部分割をめぐって」『信濃』第32号第6号 信濃史学会



1. 第1地区試掘



2. 第1地区TP-1



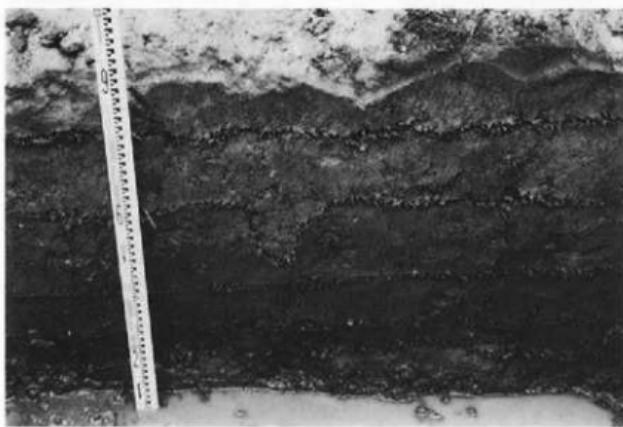
3. 第2地区試掘



1. 第3地区試掘



2. 第4地区試掘



3. 第4地区 TP-7



1. 調査区南東部



2. SD-3 旧用水路址



3. SX-5 樹枝状造構



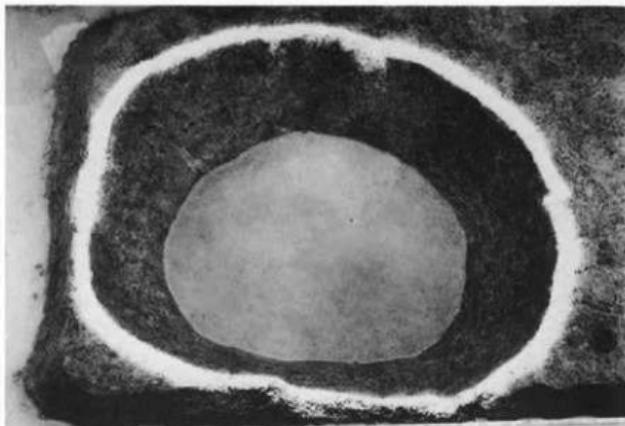
1. B 地区
17-18G



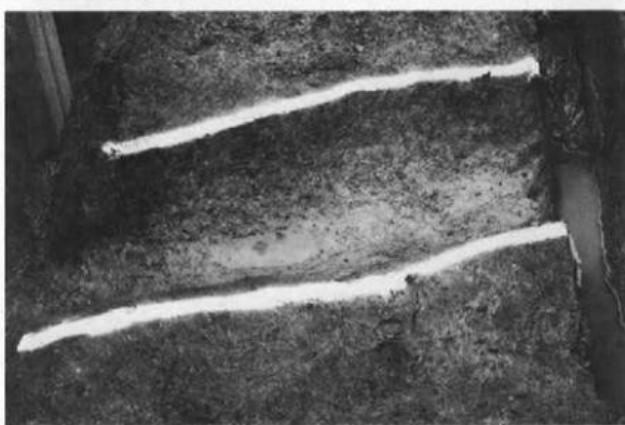
2. B 地区
17-18G



3. B 地区
第IV b 下層
16-17G



1. B 地区
SK-21土坑



2. B 地区
SD-27溝



2. B 地区 (19~20G)
調査風景



1. B 地区
SK-27 土坑



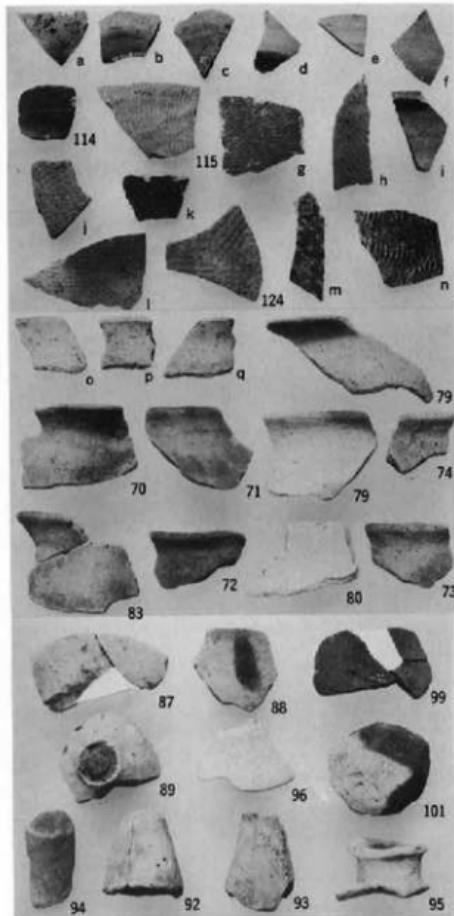
2. C 地区
SD-1 溝群

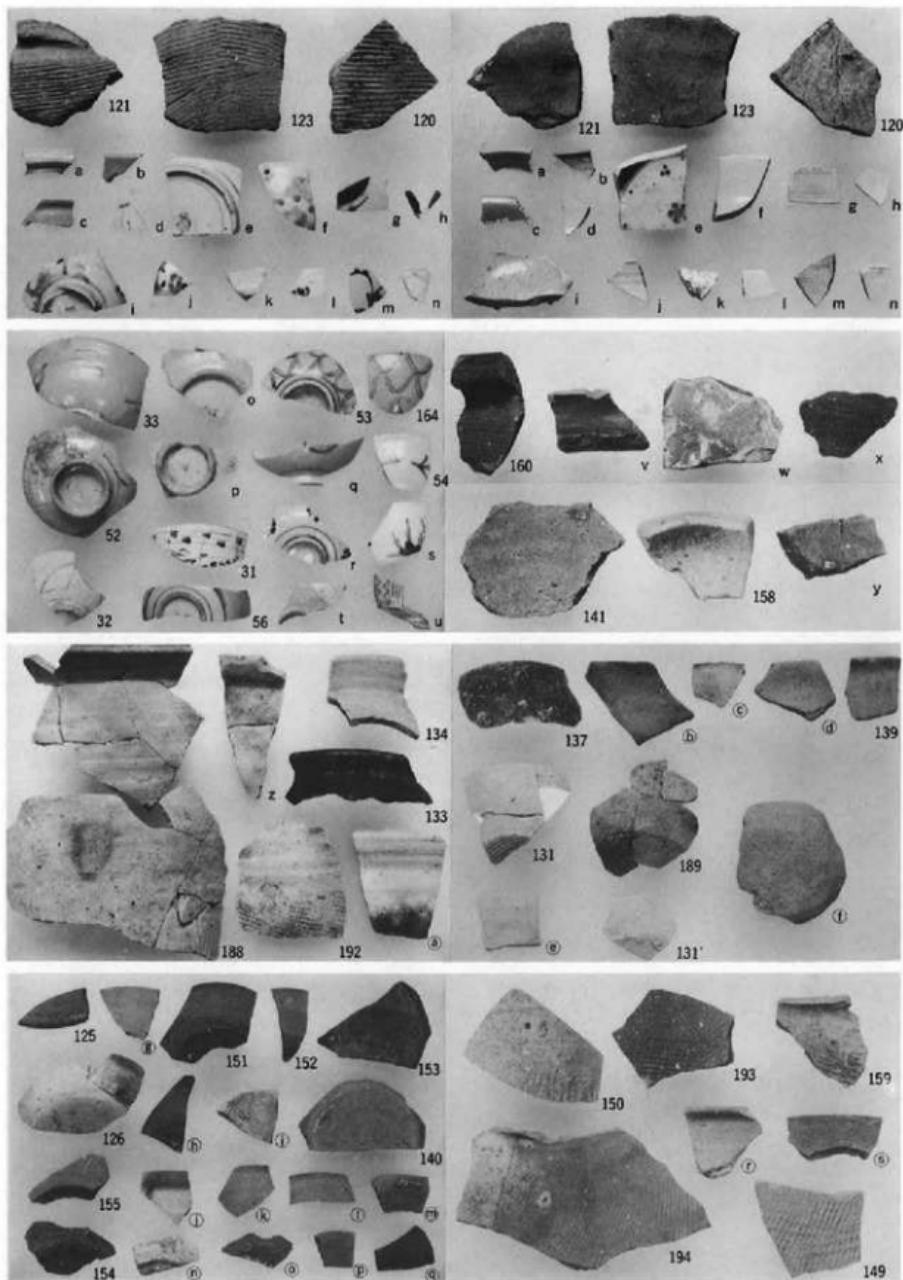


3. C 地区
SD-2 溝

出 土 遺 物

図 版 7





発掘調査体制

調査主体 柏崎市教育委員会 (教育長 山田恒義)

総括 仲野 新一 (社会教育課長)

管理 石井 良男 (同 課長補佐)

講 周一 (同 副参事)

花井 慶雄 (同 社会教育係長)

庶務 阿部せつ子 (同 庶務係主査)

調査担当 品田 高志 (同 社会教育係学芸員)

調査員 阿部 正昭

試掘確認調査 安沢国治・五十嵐倉治・池島増雄・滝沢泰一郎・武藤欣一

発掘調査 池田善雄・伊部正十郎・岩間正彦・押見真吉・下條輝夫・外山薰・池田豊子・

遠藤千代・押見ヨネ・黒金静江・佐藤セツ・佐藤初子・下條静江・下條ツヤ・下

條トモエ・下條道子・高野道枝・新田タブ子・新田ミサフ・吉田チイ子・吉田照
子

整理作業 帆刈敏子・大野博子・赤沢フミ

柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第8
帝国石油新長岡ライン
埋蔵文化財発掘調査報告書

試掘確認調査報告
吉井水上I遺跡
戸口遺跡

昭和62年3月31日 印刷
昭和62年3月31日 発行

発行 柏崎市教育委員会
印刷 三秀社